

石川県議会議員中国行政視察

報 告 書



平成23年10月
石川県議会

石川県議会派遣中国訪問団員名簿

自由民主党 木本利夫 (団長)

清風・連帯 山根靖則 (副団長)

新進石川 新谷博範 (秘書長)

公明党 増江 啓

自由民主党 徳野光春

自由民主党 善田善彦

黎明会 本吉淨与

議会事務局 二木 渉

日 程

日 時		発着地及び場所	交通機関	行 程	訪問地名	
1 日 目	10/23 (日)	13:30	小松空港発	航空機 MU558便	空路: 上海浦東国際空港へ	上海市
		15:00	上海浦東国際空港着		バス	
		15:40	上海浦東国際空港発	高速列車 G7072		
		16:45	上海駅着		バス	
		17:20	上海駅発	「秦淮河」(内秦淮河)視察		
		19:20	南京駅着			
		19:40	南京市内			
		20:40				
2 日 目	10/24 (月)	8:30	南京市内	バス	ホテル発	江蘇省南京市
		8:45		バス	「南京臨時總統府」視察	
		9:50		バス	世界遺産「明孝陵」視察	
		11:00		バス	江蘇省人民代表大会常務委員会 表敬訪問	
		12:10			江蘇省人民代表大会 主催歓迎宴(昼食)	
		14:15		バス	「南京城壁」視察	
		15:30	南京空港着	バス	搭乗手続き	
		16:10	南京空港発	航空機 MU2895便	空路: 西安空港へ	
		18:30	西安空港着		バス	
19:30	西安市内		【西安泊】			
3 日 目	10/25 (火)	7:40	西安市内	バス	ホテル発	陝西省西安市 陝西省漢中市
		11:20	漢中市洋県	バス	陸路: 西安市から漢中市洋県へ	
		12:30			昼食	
					「洋県トキ自然保護区」 ・野生トキの生息状況調査 「陝西トキ救護飼養センター」 ・トキの保護活動及び人工育成調査	
		17:40	西安市内	バス	陸路: 漢中市洋県から西安市へ	
19:00		バス	夕食	【西安泊】		
4 日 目	10/26 (水)	7:40	西安市内	バス	ホテル発	陝西省西安市
		8:40		バス	世界遺産「兵馬俑」等視察	
		12:30	西安空港着	バス	空港内で昼食後、搭乗手続き	
		15:00	西安空港発	航空機 MU291便	空路: 上海浦東国際空港へ	
		17:05	上海浦東国際空港着		バス	
		19:00	上海市内			
5 日 目	10/27 (木)	7:00	上海市内	バス	ホテル発	上海市
		7:40	上海浦東国際空港着	バス	搭乗手続き	
		9:25	上海浦東国際空港発	航空機 MU557便	空路: 小松空港へ	
		12:30	小松空港着			

平成23年10月23日(日)

<結団式>

場所：小松空港 <北陸エアターミナルビル役員室>



出発に際して、今回の訪問団の団長を務める木本利夫議員から挨拶があった。



団員一同、今回の調査目的達成のため、各々の役割と責任に基づき行動することを確認した。

~~~~~  
小松空港からCES（中国東方航空）にて上海へ

搭乗はMU558便で小松上海間を約2時間30分のフライトとなる。小松上海便はCESとJALの共同で週4便（月曜日、木曜日、金曜日、日曜日）運行しており、機材はエアバス社のA319（119席）とA320（155席）を使用し、どちらも内部が一つの通路で仕切られたナローボディタイプの旅客機である。

昨年度、便の利用者数は約3万5千人であり、対前年度比約1.5倍と順調な伸びであったが、今年度は東日本大震災の影響が心配である。



出発日の小松空港は休日、ちょうど小松空港開港50周年記念イベント「空港みらいフェスタ」の開催日にも重なったためか、大勢の来場者で賑わっていた。さらに上海便で帰路につく中国人観光客等も多数いて、搭乗手続きも長蛇の列となってしまった。一緒に手続きをする搭乗者は、イン・アウトちょうど半数ぐらいだろうか。ようやく乗り込んだ機内の方はほぼ満席状態であり、小松上海便の人気の程を伺えた。



予定時どおり2時間30分のフライト後、土砂降りの小松空港からどんより曇り空の上海浦東国際空港に到着。総面積40平方キロメートルの巨大な空港であり、長い通路を渡って、多くの乗客とともに入国手続きを済ませた。移動には時間を要したものの、荷物の受け取りも評判どおりスムーズで、速やかにマイクロバスの乗車口へ移動できた。ここでようやく腕時計の時刻を1時間戻して時差を補正し、バスに乗って高速列車の待つ上海駅へ。



上海空港からは今回の訪問先でもある江蘇省人民代表大会常務委員会の委員で外事委員会委員でもある郭敏文さんや同外事委員会の張宏さん、石川県上海事務所の小田専門員が同行した。

『車窓から上海万博の跡地を眺める』

高速道路が渋滞しており空港から駅まで約1時間かけて到着したが、途中、車窓からは古くからの街並みをスクラップアンドビルドで高層ビル化しようとする建設現場が数多く目の当たりにし、上海市内の都市化がいかに急速に進んでいるのかわかった。



『金文字の駅名に巨大な液晶画面を備えた駅舎入口』

上海－南京間は中国高速列車の主要車両であるC R H (China Railway High-speed) を使用している。愛称は「和諧号」。

客室はすべて禁煙席であった。





車内は白色系の照明をふんだんに使っており、かなり明るく安心感があった。

さっそくシートに腰掛けるとクッションは厚みがあり身体をしっかりサポートして乗り心地もまずまずであった。ただし、表面の汚れがかなり気になった。

荷物棚はスケルトンタイプとなっていて荷物の視認性などに工夫がされていた。さらに天井には液晶モニターが設置されていた。



『時速303km時に撮影』

列車内は静音性が十分に保たれおり、とても300kmを超えているとは体感できないほど静かで安定していた。

客室乗務員は全員女性であった。航空機のCAをイメージしているのだろうか。また、清掃担当の職員も女性であり、短時間に巡回して車内をこまめに清掃していた。彼女たちパーサーのサービスは丁寧さが目立ったが、対照的に乗客のマナーは決して良いとはいえなかった。指定席にも関わらず、ほんのちょっとでもトイレや売店で席を外すと見知らぬ乗客が平然と自分の席に腰掛けている。空席があれば当たり前のように座る。乗務員がチケットの確認に一度も来ないことも要因の一つと思われるが、そもそも座席指定という習慣がないのだろうか。

2014年度末に金沢開業を迎える北陸新幹線だが、金沢以西の延伸やJRから経営分離される並行在来線についてなど、継続協議すべき諸課題は残しつつも、今後の早期解決を目指して、中国の高速列車のような”快適かつ短時間による”金沢－東京間の移動の実現を期待したい。



約2時間の乗車で南京駅に到着。外はすっかり暗くなっていた。途中、車窓から眺める景色はなぜか薄暗く、「積極的に節電に努めているのか？」とってしまうほど、暗い灯りの街並みばかりであった。高速列車の各駅のライトが煌々としていたせいもあり、尚更、違和感があった。

南京駅を出てみると、南京の10月の降水量は年間を通じてかなり少ない時期であったのにも関わらず、この日は不運なことに土砂降りであった。バスの運転手はじめ現地の方々は、恵みの雨だと喜んでいたが。

---

### <「<sup>しんおいが</sup>秦淮河」視察>

[歴史ある河川を活用した観光誘客促進施策について調査]

「秦淮河」は、江蘇省南京市内を貫く河川で長江下流の右支流である。古くは「淮水」と呼ばれていた。全長は100キロメートル余、流域面積は約2,600平方キロメートルで、鎮江市、南京市、江寧区などを流れている。

河川は内秦淮河と外秦淮河に分流しているが、「夫子廟」を中心に「秦淮風光景区」と指定を受け観光地化が進められている本流の内秦淮河は、



龍の飾りを付けた屋形船のような船で周遊することができる。この船の船体構造は全面ガラス張りで風雨はしのげるようになっており、さらに川の流れ自体も穏やかなことも相俟って、全天候での観光客の集客を可能にしている。現地ではこの船を、灯りの付いた船「灯船」と呼んでおり、これが何隻も大河をぐるぐる回って、南京市内のイルミネーションで飾られた街並みを見渡すことができるようになっている。実際、昼間眺めた秦淮河はけっしてきれいなものとは言えず、夜間はそれが判らないので、多彩なイルミネーションを使用し華やかに見せることで集客をしているだろう。金沢城公園をこのような色とりどりの電飾で飾れば風情がないと非難されそうだが、これほどまで多数の電飾で埋め尽くせば、豪華なライトアップによる誘客効果や観光地での防犯効果は大きく、多くの観光客を惹きつけるには魅力十分である。これも歴史ある河川を活用したアイデアの一つとしてたいへん参考となった。

平成23年10月24日(月)

## <「南京臨時總統府」視察>

[歴史的建造物の保存と利活用及び観光誘客促進施策について調査]

「南京總統府」は、1912年に孫文が臨時大總統就任時の總統府であり、その後は国民政府の總統府が設置されていた場所である。

現在、南京市で最も入館者数を誇る観光地とのこと。

旧県庁舎(しいのき迎賓館)に建物の雰囲気似ている「總統府大堂」の館内には、孫文や蔣介石の各執務室が忠実に再現されており、当時の様子うかがい知ることができるようになっている。

また、ここは太平天国時代の天王府が置かれていた場所でもあり、当時の優美な庭園「煦園」も現存しており、「太平湖の石舟」など屋外の施設も充実している。

「總統府」の敷地面積は約9万平方メートルで、2003年に完成した南京中国近代史遺址博物館をはじめ、東区、中区、西区の3つの見学区域に区分され、時代別に非常に多くの歴史的建造物が残っている。また、各施設の展示資料も豊富でとても見応えがある。ただし、視察して回るには敷地が広大過ぎて、まるで巨大迷路のように入り組んでいるため、施設をすべて網羅するには相当の時間を要するのが、良い点でもあり悪い点である。これらについては、今後の北陸新幹線開業後の本県の誘客促進にも参考に資する点は多く、兼六園周辺の観光客の回遊性向上にもつながっていくだろう。

とにかく、この「總統府」はどこの施設を回っても人だかりということが印象的だった。



## <世界遺産「明孝陵」視察>

[世界遺産の保存とそれを活用した観光誘客促進施策について調査]

明孝陵（みんこうりょう）は南京の東に位置する明の太祖洪武帝朱元璋と后妃の陵墓で、世界文化遺産の一つである。1961年に中華人民共和国国務院により「全国重点文物保护单位」に指定され、その後、2003年7月にユネスコの世界文化遺産に登録されている。

三国志で有名な呉の孫権の墓がある梅花山など、明孝陵を中心とした観光区は「明孝陵景区」と称され、周辺の中山陵や靈谷寺と合わせて南京の主要観光地となっている。

[以下、現地職員の説明を中心に]

まず、入口を進むと、四方を高い壁で囲まれた四方城があるが、当時、この四方城には屋根があったのだが、現在は四方の城壁のみが現存している状態となっている。また、城内の石碑には洪武帝朱元璋の息子で第3代永楽帝朱棣が父親の功績を讃えて建造したものである。

石碑の台座は亀に見えるが、実は「<sup>ひいき</sup>鼉頂」という伝説のいきものである。それは竜が産んだ9頭の子ども「竜生九子」の一つである。重いものを背負うことを好むことから、中国各地の石柱などの土台になっていることが多い。



この城壁を抜けると、神道へ通ずるのだが、神道の両側には獅子、らくだ、象、麒麟、馬、かいちの6種類の石像が対で配列されている。

これら石像をつくるための大きな石は、浅めの水路を遠路はるばる繋げて、そこへ流し込んだ水を冬季に氷に変えることで、氷上を滑らせて運んだとのこと。実に理に適った方法である。現代のようなクレーンやトラックはもとより土木技術も発達していない中で、このような合理的な方法を思いつくのだから、先人の知恵にはつくづく感心させられる。

道の両側に植えられたプラタナスが見事に色づいており、黄色い落ち葉が石畳いっばいに広がっていた。とても風情のある並木道であるが、清掃等の管理費用などはどうしても嵩んでしまうだろう。



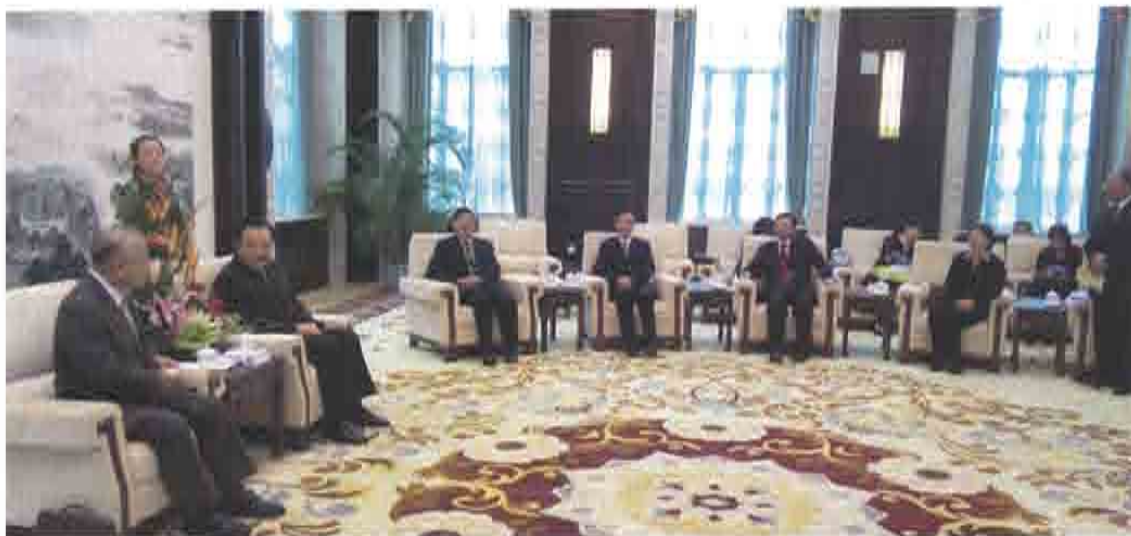
一番大きな象の石像は高さ約3.5メートルもある。この大きな石を氷の上で滑らせて運んだというのだから驚きである。

明孝陵は14世紀に建造され、後日視察をする兵馬俑を含んだ秦の始皇帝陵と比較すると歴史こそ浅いが、広大な陵墓や神道に並ぶ巨大な石像等々、歴史的価値及び芸術的価値は非常に高く、世界遺産に登録されるに相応しい建造物である。

この明代皇帝の陵墓をユネスコの世界文化遺産に登録し、さらには周辺の観光地と複合し、「明孝陵景区」という巨大な観光地として観光誘客に結びつけてしまう中国のスケールの大きさには驚くばかりである。

本県では、世界文化遺産の候補として「城下町金沢の文化遺産群と文化的景観」及び「霊峰白山と山麓の文化的景観－自然・生業・信仰－」を関係自治体と共同提案しているが、既に登録済みの文化遺産の現況は見習うべき点が多く、文化的資産の維持、観光誘客及びその対応など、これを参考に資することは大いに意義があるものと考えられる。

## <「江蘇省人民代表大会常務委員会」表敬訪問>



### ■江蘇省人民代表大会常務委員会出席者の紹介

丁解民 江蘇省人民代表大会常務委員会副主任

朱堯平 江蘇省人民代表大会常務委員会委員 財政經濟委員会主任

陳爲民 江蘇省人民代表大会常務委員会副秘書長

沈建輝 江蘇省人民代表大会常務委員会委員、農業興農村工作委員会副主任

郭敏文 江蘇省人民代表大会常務委員会委員、外事委員会委員

### ■石川県議会訪問団の自己紹介

新谷訪問団秘書長より順次紹介あり。

### ■江蘇省人民代表大会常務委員会丁解民副主任の挨拶（概要）

古都南京は秋が一番美しい季節であるが、この美しい季節に古い友人である石川県議会の木本議員をはじめとする石川県議会訪問団の皆様をお迎えできたことはたいへんうれしいことでもあり、まずは江蘇省人民代表大会を代表して心より歓迎申し上げたい。

木本議員は江蘇省の古い友人であり、また何回も江蘇省を訪れたことがあるだけでなく、長年にわたって両省県の友好交流に対して多大なご尽力をいただいている。

また、今回の訪問団には古い友人だけではなく、若い議員の皆様にもご参加いただいております、これでまた新しい友人が増えたことはたいへん喜ばしいことである。

江蘇省と石川県の友好交流の歴史は30年を越えており、長年にわたって中日友好に携わってきた。その中でも、交流の一環として江蘇省の公務員の研修も受け入れてもらっており、先ほど紹介した沈建輝副主任

も1990年に半年間、石川県農業試験場で研修していた。沈さんは現在は江蘇省で仕事をしているが、今でも両省県の友好の架け橋として活躍しているところである。

これまで30年の間には両省県の友好関係はいろいろな分野で繰り広げられ、また大きな成果も出ている。特に、故米沢外秋議員や金原博議員、谷本正憲知事には長きにわたり両省県の友好交流にご尽力いただき、いずれも江蘇省栄誉公民称号を受章している。

2009年には木本議員が石川県議会の議長在任中に代表団を連れて江蘇省を訪れ、昨年は作野前副議長が石川県の訪問団とともに江蘇省を訪れておりますが、江蘇省人民代表大会としては、これからより一層石川県議会との交流を拡大し、また議会交流を通して民間交流を推し進めるなど、今後とも石川県と手を携えて努力していきたい。

ご存じのとおり中国と日本は一衣帯水の隣国であり、中日両国の関係は中国にとっても日本にとっても特別な意味を持っている。両国の間では経済相互補完性も強く、また連携できる分野も多い。金融危機や気候異変に対する対応、また環境保全などいろいろな分野において両国が協力可能な潜在力はまだまだ大きいのと認識している。また、中国と日本はお互いの利益が合致する分野は非常に多いので、これからも友好関係を強化することで両国の平和と発展につながるだろうし、世界平和にも寄与できるだろう。また、中日両国の友好関係を発展させていくには、相互理解と相互信頼が不可欠である。よって、お互いに時代の流れをしっかりと見据えて、多分野にわたる交流を推し進めながら、特に民間交流と青少年交流に力を入れ、これらを通して国民の相互理解を深めることができる。

ご存じのように今年3月には東日本が人類史上最も激しい大震災に見舞われた。今は日本政府も国民も一体となって被災地の復興に取り組んでいるが、中国は隣国として、江蘇省は石川県との友好都市として被災地の様子を見守っている。地震発生後、中国のテレビニュースでも被災地の様子は連日報道されていた。当時はテレビやインターネットを通して被災地の情報を集めて、被災地がどうなっているのか、すごく心配したが、その後、日本政府、そして日本国民の努力により被災地が徐々に復興しているのを知った。隣国として、石川県の友好都市の江蘇省としてたいへんうれしいことである。日本が被災地として今直面している新しい課題を乗り越えて一日も早く元の生活に戻れることを祈っている。中国から日本への観光客は急激的に減少したわけだが、その後、放射能の影響が福島を含めて一部の限られた地域であり、石川県を含めた日本の多くの地域はまだまだ安全で安心できるということをマスコミの報道

等で知り、今は事態の収束を待って沈静化するにつれ観光客も少しずつ回復しているところである。江蘇省政府及び人民代表大会としても、いろいろなマスコミなどのルートを通して、日本はまだ安全で安心な国ということをお庶民のみなさんに伝え、たくさんの方々に日本に行ってもらいたい。また、両省県の人的往来もこれからますます盛んにしようと思う。日本の観光業もぜひ一日も早く地震以前の水準に回復できますように心から願っている。

ご存じのように、江蘇省と石川県は人的往来が盛んなだけではなく、経済、貿易関係も密接な関係にある。金融危機の際には少し影響を受けたが、その後、対日貿易はスムーズに回復している。今年の1月から8月までの日本への輸出入額は江蘇省だけで430億ドルに達しており、昨年比の2割増である。そのうち輸出額は192億ドルに達しており、昨年比23%増である。そして日本からの輸入額は238億ドルで昨年比21%増である。輸出入額をみると日本からの輸入額の方が輸出額より上回っており、輸出も輸入もたいへん速いスピードで成長している。

1月から8月までの日本からの投資は17億ドルになっているが、今年に入って円高が進んでおり、日本経済にいくらか陰を落としているだろうし、日本企業も非常に難しい局面に直面していると思う。ただし、日本の企業は技術力も非常に高く、相互競争力も高い。日本製品は世界各国で高い評判を集めており、これは全て日本経済の回復に一助できるだろうと思う。江蘇省と石川県は産業の面でも市場のニーズに関しても相当に互換性が高いと思う。これからは協力できる分野はしっかりと検討し合って、お互いの長所を取り入れながら自国の短所を補うことを願っている。



## ■石川県議会中国訪問団長木本議員のあいさつ（概要）

尊敬する江蘇省人民代表大会の丁副主任はじめ人民代表大会の皆様には、今回の歓迎を心から感謝申し上げたい。

また3月の東日本大震災の際には、江蘇省の皆様をはじめ中国の国民の皆様、政府の皆様から多大なご支援を受けたことに対してたいへん感謝している。今、我々日本人は被災された方々だけではなく、日本国民全体が心をつにし、震災の復興を目指して頑張っているところである。

今、日本でよく使われる言葉に「絆」という言葉があるが、それは心と心をつなぐ、心と心をつなぐということである。我々は江蘇省の皆様とこの「絆」をより太いものにしていきたいと思っている。

昨日、我々は小松上海便で中国に来訪したのだが、同じ機内に石川県の女性団体交流事業派遣団の方々も乗り合わせており、本日は同じようにここ南京において交流活動をされていると思う。さらに偶然なことに、蘇州へ向かう金沢市議会議員の一行とも同じ便で一緒となった。

私自身も2年前に石川県議会議長として南京を訪れ、梁保華主任をはじめ大勢の方々に歓迎を受けた。また、つい2週間前の訪問では、私のほか石川県議会の前副議長であった作野白山市長や山辺羽咋市長、八十出内灘町長など約40名で構成する友好訪問団が、江蘇省の南京市や各市町の姉妹友好都市である蘇州市などを訪れたばかりである。石川県と江蘇省が親密になることは当然重要であるが、それと同時に石川県内の市や町が江蘇省の各市と交流することもたいへん大事なことである。

私は石川県日中友好協会の会長代行をし、主に江蘇省の担当と言われているのだが、それは1973年の文化大革命が真っ盛りの折に中国から青年代表団が石川県に来県し、私はそのとき石川県の青年団の会長をしていた関係で、代表団の歓迎委員長をさせていただいた。その返礼として中国政府から招聘を受けたのが1976年1月の中国訪問である。それはちょうど尊敬する周恩来総理が亡くなられた直後であり、中国訪問としては微妙な時期だったのだが、中国のみなさんからは大歓迎を受けた。そのときは上海、南京、北京を訪問したのだが、特に南京での青年交流がすばらしく、我々は毎年南京との青年交流を続けたいと知事をお願いをした。それがきっかけで石川県と江蘇省の間で青年交流や女性交流、経済交流、文化交流などいろいろな交流が始まり、ちょうど35年が経過した。

今は、石川県議会議員として、これからも石川県議会と江蘇省代表人民代表大会がお互いに交流をより深めて、石川県と江蘇省の友好の架け橋として我々が先頭に立ちたいと思っている。



今ではもう中国と日本の友好は世界平和の源になっていくことでもあり、これからは国民レベルを超え、省や県のレベルとして、草の根の友好を深めていき、世界平和のためお互いに頑張っていきたい。

ぜひ、今後とも、皆様方には震災後の安全な日本へ、石川県へお越し  
いただきたい。



## <「南京城壁」視察>

[世界遺産の登録を目指した史跡（城壁）の保存とそれを活用した街路整備及び観光誘客促進施策について調査]

「南京城壁」は明朝初代皇帝である朱元璋が1336年に南京へ遷都した際、周辺諸国からの馬による攻撃を防ぐために建造した城壁である。建造には1万人もの人夫を動員し、30年近い歳月をかけた結果、その全長は約35キロにも及ぶ城壁となった。当時は都の周囲を宮城、皇城、京城、外郭という4重の壁で囲んでいたが、現在、城壁の約3分の1が失われ、現存するその大部分は京城城壁であったが、江蘇省南京市では世界遺産登録を目指して城壁の保存・修復活動を続け、かなりの進捗率



で修復が進んでいるとのこと。ここが世界遺産となれば、さらなる誘客効果ができるが、「明孝陵」や「兵馬俑」に比較すると、集客力としてはやや劣るかもしれない。

城壁には13門の城門があったそうだが、修復され現存するのは、「玄武門、中山門、中華門、集慶門、漢中門」の5門だけである。今回はその中でも一番規模の大きい「中華門」と周囲の城壁を視察した。

[以下、現地職員の説明を中心に]

城壁の焼き煉瓦は南京のものだけでは足りず、全国125県に命じて作らせたが、その質を保障するため、重さとサイズを均一なものとし、煉瓦の裏には製造者の刻印を入れることとなっていた。

できあがった煉瓦は、兵士の頭の高さから落として強度を試された。二度続けて割れた場合、その製造責任者は殺されたので、みな命がけで強度の高い煉瓦を作った。それら丈夫な煉瓦のおかげで城壁は600年経過した現在も頑丈な姿を保っている。

本県の石川門も同様であるが、南京市民にとってこれら城壁や城門は、日常生活の一部として、すっかり街並みにとけ込んでいるように感じた。

観光名所として、また普段どおり市民が行き来し、車が通る。そんな街の象徴ともいべき歴史的建造物「南京城壁」の修復・保存されている様子を眺めながら南京市内を後にし、同じく城壁の都市である西安に向かうため南京禄口国際空港へと急いだ。

国内便もすべて中国東方航空を利用をした。この南京・西安便も搭乗率は非常に高く、機内はほぼ満席に近い状態だった。南京からおよそ2時間で西安に到着したが、荷物が空港のターンテーブルになかなか届かないというハプニングがあり、いわゆる「ロストバゲージ」を覚悟したのだが、30分程度そのままテーブル前で待ち続けたところ、ようやく荷物が到着し、一同ほっと胸をなで下ろした一幕もあった。

空港からの屋外に出ると中国内陸部独特の乾燥した空気に多少驚きつつ、すっかり暗くなった夜道をマイクロバスにて西安市内の食事会場へ向かった。

西安の古称は「長安」であり、周知のとおり千年の歴史が続いた中国の都である。



空港からおよそ30分かけて歴史と伝統の古都西安の中心部に到着。夕食会場では陝西省野生動植物保護協会の常秀雲副秘書長さんを講師にお招きし、翌日の洋県での野生トキ視察の予習も兼ねて懇親会を行った。

人とトキが共生する豊かな地域環境づくりが目的の情報誌「ひともトキも」(日本語版)、常秀雲副秘書長さんが羽咋市在住の村本義雄さんのトキ保護活動について執筆された「一人の日本のお爺さんの朱鷺情話」の2冊をテキストに、トキをはじめ陝西省の野生動物保護の課題と現状について説明を聴取した。たいへんわかりやすく丁寧な説明であった。

また、懇親会には石川県華僑華人聯誼会の種事務局長さんも出席していただき、西安の経済情勢や石川県との友好交流事業について意見交換を行った。

懇親会后、ようやくホテルにチェックイン。連日午後9時過ぎのホテル到着となった。翌日の野生トキ調査は同じ陝西省でも西安からはるか遠方の洋県へ向かうため朝8時前には出発予定となっている。なかなかタイトな日程である。さらに、この時点での天気予報は雨であった。雨天はトキ視察の妨げとなるため、できれば避けてほしかったのだが。

平成23年10月25日(火)

午前8時、西安市内から200km以上離れた漢中市洋県へ向けて出発。写真のバスに乗車して高速道路と一般道で約3時間30分の行程である。



ホテル出発直後の西安市内は大渋滞であり、途中、車窓から街並みを眺めると、多くの市民が公園や広場で太極拳や卓球をする姿がみられた。卓球はインドアスポーツと認識していた

が、屋外にずらっと卓球台を並べて市民が楽しんでいる光景はなかなか盛観なものであった。

市街地を抜けると車の通行量は徐々に減っていき、高速道路に入るとその台数は一気に減ってしまった。ここでふと気がついたのは、どの車も追い越しをするたびにクラクションを鳴らして走り去る。この行為は注意喚起をしているつもりなのだろうか？とても違和感があった。

また、中国の高速道路にはサービスエリアがあまり点在していないように感じた。写真は往路で唯一のサービスエリア。洋県まで200km以上の距離をマイクロバスで揺られながら、トイレ休憩はこの一カ所のみというのもなかなか厳しい状況といえる。



このまま漢中市に向けてスイスイと走って行き

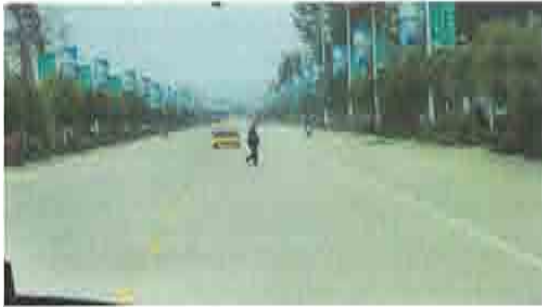
たかったが、途中から突然土砂降りになってしまった。雨天であっても野生のトキに会えるのだろうか・・・、不安は募る一方であった。

## <「洋県トキ自然保護区」視察>

[野生トキの保護活動について調査]

不思議なことに、洋県のインターチェンジに近づいた途端、それまでの降雨地域を抜け出したかのように曇り空の景色に変わった。

とりあえず野生のトキと遭遇する可能性が高くなった事は間違いない。



出発からちょうど3時間30分かけて洋県の中心街に到着。洋県に入ると人通りがかなりまばらになり、いかにも野生のトキが生息していそうな街の雰囲気になった。

街の中心部で昼食を軽く済ませた後、バスはどんどん田園地帯へと向かって、いよいよ待望のトキ自然保護区に到着した。



洋県は貯水ダムやため池が多数存在する湿地帯と聞いていたが、意外にも現地は日本の中山間地域のように田畑が連なっていた。

同じ陝西省でも、西安と違って随分と長閑な風景である。



そんな中、特に驚いたのは、現地では牛が田を耕しているのである！

耕運機を押す農家の方も数人みかけたが、主流は牛である。トラクターに至っては皆無であった。

洋県で野生のトキが再発見されたのは1981年5月。かつては中国の広範囲にトキが生息していたが、1964年の甘肅省での生息確認を最後に絶滅したのと思われていた。その後、生息調査を実施したところ、洋県で7羽のトキを見つけ、その生息地の保護と人工繁殖を行った結果、日本鳥類保護連盟2010年10月の概算によると約1,800羽まで増やすことに成功したとのこと。既に繁殖地も洋県を越えて西郷県や城固県まで広がり、行動範囲に至ってはさらに何県にも跨って広範囲になっている。着々とその個体数は増え続けているようだ。

このトキ自然保護区は3万7千ヘクタール以上にも及び、中国政府が積極的に保護活動を進めている区域である。なかでも洋県は農薬や化学肥料の使用はもとより森林の伐採さえ禁止している。これらを徹底することで開発を制限し、生産性や効率性を度外視して、地元住民が一体となってトキの保護活動に取り組んでいる。まさに住民とトキが共生しているのである。



常副秘書長さんの紹介もあり、現地ではトキ救護飼養センター長から派遣されたベテランのトキ保護職員の方が案内役として待機していた。

さっそくトキの生息場所へ案内してもらうため、まず、午前中に地元住民が見かけたという川縁付近の最初のポイントに向かったのだが、ここにはトキは1羽もいなかった。(サギのような白い鳥はみかけたのだが・・・)

そう簡単には見つからないのだろうか。



次のポイントへ移動するため、随行の保護職員がパトロール中の別の職員と携帯電話で連絡を取り合ったところ、現在地近くの田んぼで数羽見かけたとの情報が入り、すぐに目的地へ駆けつけることにした。

目撃地付近に到着すると、保護職員が不意に100m程先の田んぼを指さして、「あそこに3羽いる」と教えてくれた。

興奮を抑えながら畦道を小走りで近づくと、確かに3羽の白い鳥が餌を探して田を啄んでいた。



待望の野生のトキとの遭遇である。

しばらくは田んぼ一枚くらい離れてトキを眺めていたが、より近くで観察するため徐々に近づいて行くと、人の気配に驚いてしまったのか3羽とも大空高くへ飛び立ってしまった。

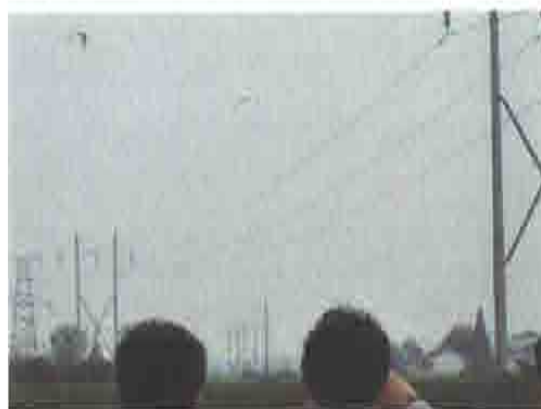


その際のいわゆる“とき色”と呼ばれる羽をひろげたときの鮮やかなピンク色は、思わず見とれてしまうほど綺麗なものであった。

この羽ばたいたときの美しさに人々が魅了されるのだろう。



飛び立ったトキ3羽はそのまま遠くに去ってしまうのかと思いきや、数百メートル離れた小高い畑の先にすぐさま舞い降りてきたのである。



そこで、また畦道を歩いて近づいてみたところ、そこには先ほど観察した3羽以外にさらに6羽のトキが姿を見せてくれたのだった。

9羽もの野生のトキと出会えたのは予想外の幸運であった。

30年前には絶滅寸前の7羽しかいなかったにも関わらず、こうして多くのトキが地域住民と共生しているのは、前述の水田の農薬や化学肥料の禁止による餌場の確保、また林木の伐採を禁止し営巣地やねぐらを保護するなど、これまで実施した数々のトキ保護事業の立派な成果といえる。



一方で、これら9羽のトキの傍らでは地元の農家の方々はせっせと農作業に勤しんでいた。トキの生息環境保護を進める反面、大型機械の導入やほ場整備などを行わず、様々な制約を受けてこれまで農業を営んできた地元住民の努力は、並々ならぬものであったと思われる。



「稀少な国際保護鳥の生息地保全保護」と「地元住民の生活向上及び地域開発」の両立。この矛盾をいかに克服するかが今後の課題ではないだろうか。



大空に舞い上がる野生のトキの姿は本当に優雅で美しく、いつまでも眺めていたい光景であったのだが、名残惜しい気持ちを抑えつつ、この場を後にした。

本年6月11日には「世界農業遺産国際フォーラム」において能登4市4町で構成する能登地域GIAHS推進協議会が申請した「能登の里山里海」が「世界農業遺産(GIAHS)」に認定されたところである。それも同時に申請した新潟県佐渡市の「トキと共生する佐渡の里山」とともに日本国内初の認定である。これが石川県生物多様性戦略ビジョンの中長期目標(2050年目標)に掲げている『生物多様性が確保され、野生のトキが舞う「いしかわ」』が実現されることの契機となり、近い将来、石川の里山においても、このようなトキの舞う美しい風景が、ごく当たり前の自然の景色として映し出されることを期待したい。

#### [現地における保護職員の説明]

- ・ 洋島のトキの保護区は半径約20キロの範囲である。その区域内にトキが約1,000羽生息している。野生のトキはここにしかいない。
- ・ トキの生息地の田畑は農薬を使用しないことになっている。そのエリアは保護区の中心部(中心街)から約半径10キロである。これはトキと共生するための方策であるが、ここに住む農民は無農薬の農業をするため国からの援助を受けている。
- ・ 収穫前は川で餌を探しているが、稲の刈り入れが終われば田んぼに飛来してくる。

- ・トキが田畑にやってくる時間帯は朝10時頃であり、巣に戻る時間は夕方の5時半くらいである。特に巣に戻るときはたくさんのトキの群れを見ることができる。
- ・トキの繁殖期は毎年3月～7月の期間である。
- ・1回の産卵の数は3個～4個である。通常、その産卵したもののうち1羽だけが元気に成鳥になることができる。



#### [Q & A]

Q：トキは洋県にしかいなかったのか。

A：そうです。1981年に再発見した7羽もこのあたりにいた。当時、中国科学院での「トキは世界の何処かにまだ現存しているのだろうか」という疑問が話題となり、昔ここにトキがいたという噂を聞きつけた北京の研究者がわざわざ洋県までトキを探しにきて、地元農民の案内によって、生きているトキをみつけた。さらに、トキのあとを追いかけたところ、トキの卵もみつけ、人工飼育を続けた結果、徐々に数が増えていった。

Q：巣に戻るときにたくさんの群れというのはどのくらいの数か。

A：100羽以上の群れを見ることができる。

Q：普段トキは何処をねぐらにしているのか。

A：夜は森の中で寝ている。

Q：トキに天敵はいるのか。

A：ここではヘビが天敵である。ヘビはトキを食べ、巣にある卵も食べてしまう。

Q：トキの雛は何を食べるのか。親鳥と同じようにドジョウを食べるのか。

A：トキの親鳥は、自分が食べた餌を半分くらい消化して、それをまた口から戻して雛に与えている。餌は主に水田の昆虫である。



Q：トキ保護職員は、普段は何をしているのか。

A：自然保護区域内でトキを監視したり生息状況を報告する専門職である。その業務内容はトキの普段の生活を妨げるような行為を見張ること、つまり、トキに

むやみに近づいたり、写真を撮ったり、おどかしたりするなど、トキに害を与える者がいないように見回することを業としている。

いわゆる警察官のような取り締まりを目的とした職業である。

(保護職員は政府の援助活動の一環として地元住民から採用することになっている。)

Q：先ほどから多くの子どもたちを見かけるのはなぜか。

A：近くに学校があり、ちょうど下校時間なのである。

(佐渡市内の小中学校には姉妹校として洋島の学校と友好交流している学校もあるとのこと。)

---

引き続き、自然保護区内の「トキ救護飼養センター」へ向かった。



『遠方からでも目立つトキ救護飼養センターの巨大ケージ』

## <「陝西トキ救護飼養センター」視察>

[トキの人工飼育と保護施策について調査]

陝西トキ救護飼養センターは、トキの人工飼育及び繁殖を目的とし、1990年に設立された施設である。

敷地面積1.5ヘクタールの同センター内には、飼育ケージ鳥舎が24箇所備わっているほか、ド

ジョウの飼育養殖池や人工水場・湿地があり、さらに、2002年には高さ35メートル、敷地面積7,240㎡の大型飼育場を増設している。このスペースはトキを野生に戻すための実験拠点として、野生のトキの生活環境に合わせた工夫がされており、トキがエサを食べ、空中を飛び、自然に繁殖するのに最適な環境が提供されている。



『センターに入ると目前にトキ像がお出迎え』

トキの繁殖のためなのか雄雌ペアのケージが幾つも並んでいた。



一般的な動物園の鳥類繁殖ケージより大きめで余裕のあるサイズであった。



これだけ間近でトキの姿を観察できるのは、日本国内では佐渡トキ保護センターのみであり、同センターでは屋外の赤いケージから数メートルの近距離でトキを観察ができるようになっているが、今回の訪問団のメンバーで同センターの視察経験があるのは木本団長だけであった。

他のメンバーは、初めての体験に感激も一入であった。



外壁をはじめフェンスにもトキの絵画が数多く飾られている。

続いて隣接の巨大な飼育ケージへ移動。



ケージ内には職員が常駐している。



トキの生息地である湿地帯を再現したケージ内の人工湿地には多くのトキが群れをなしている。

周囲を囲むネットもかなりの高さを誇っており、トキが飛び回るには十分のスペースを確保している。



ケージの端に設置された観察舎からは、肉眼でもはっきりとトキを観察することができるようになっている。

先ほどの鉄格子のケージとは異なり、このケージはトキが気持ちよく羽ばたくこと、池でドジョウなどの餌を捕食できること、緑たっぷりの草木で自然に近い生活ができることなど、トキが野生順化するための条件がしっかりと備わった育成環境施設そのものであった。



現在、日本国内でトキの飼育が行われているのは、本県の「いしかわ動物園」のほか、自然放鳥による野生復帰まで実施している佐渡トキ保護センター・佐渡トキ野生復帰ステーション。さらには、東京の多摩動物公園や出雲市のトキ分散飼育センターの4地域5施設である。分散飼育が目的なので、佐渡以外の地域は伝染病の予防等の理由から非公開となっている。野生生物保全を進める上ではやむを得ない処置なのではあるが、この厳重な飼育の結果、平成23年7月26日付け環境省の発表によると、日本の飼育下におけるトキの総個体数は188羽になったとのこと。昨年は173羽、一昨年は153羽と、その数は順調に増加しており、全国の飼育成果は確実に上っていると推測できる。

野生復帰のための訓練施設「順化ケージ」等は佐渡にしかないため、本県を含め残り3地域は繁殖した個体をどんどん佐渡へ移送せざるを得ない。そんな中、平成23年10月3日には、本県いしかわ動物園から

雄6羽、雌7羽の計13羽のトキが、昨年1月の分散飼育開始からはじめての移送を行った。中国の規模とはまだまだ比較はできないものの、分散飼育の将来性に大きく期待できるものである。

今後、1羽でも多くのトキが放鳥され、日本の大空がとき色で染まることを祈願して、懐かしい風景の村々が連なる洋県を後にした。

帰路においても高速道路をひたすら走り続け、西安市内に着いた頃はすっかり夕暮れとなっていた。せっかくなので、ホテルまでの経路の途中にある三蔵法師ゆかりの「大雁塔」を視察した。

「大雁塔」は唐の第3代皇帝高宗が建立した大慈恩寺の院内にある塔である。高さは7層で約64メートル。当初は5層だったが、8世紀に10層まで積み上げられ、その後8層以上の階が倒壊したために現在の7層構造となってしまった。とはいえ、歴史ある高層建築であることに変わりはなく、西安の観光地としてはとても魅力的かつ市内のシンボリックな役割を担っているようにも感じられた。現在建設中の東京スカイツリーや大阪の通天閣のように、高層建築は街づくりを進める上で視覚的にも集客においても都市基盤整備の中心拠点として重要である。

ちなみに塔には玄奘三蔵がインドから持ち帰った膨大な経典などが大切に保存され、収蔵施設としても利活用されている。

写真でも塔が左に傾いている事がよく判かる。

傾斜原因には地下水の水位が大きく影響しており、西安市では井戸の使用中止や地下水の注入を行うなど傾斜の矯正を施して回復に尽力しているとのこと。貴重な文化財でもあり、これら方策により一刻も早く元の姿に戻ることを期待したい。



平成23年10月26日(水)

中国訪問から4日目。本日は西安市内のホテルから郊外の世界遺産「兵馬俑」へ向かう。

西安に到着して、とりわけ驚愕したのは、西安市内の大渋滞と歩行者やドライバーのマナーの悪さ。この日も車内からとても凝視できないほどスリリングな車線変更と歩行者回避を体験することができた。信号無視する者こそいないのだが、横断歩道を渡らずに平然と道路を横断する歩行者は大勢いる。また、せわしなく車線変更をして一秒でも早く先を急ぐドライバーの多いこと多いこと。多数の車が何十回、何百回と鳴らして共鳴するクラクションには思わず耳を塞ぎたくなるほどだった。

ところで、中国では右を向いても左を向いてもフォルクスワーゲン社の車が主流を占めていた。同社の中国での市場拡大はすさまじく、これだけのシェアを確保できたのも早期から直接投資で合併会社を設立するなど重点投資を続けてきた結果ではないだろうか。

また、中国では電動自転車が急速に普及しているが、これは生活水準が向上したことに加え、多発する交通事故の防止等の理由からオートバイの通行を禁止している都市部が増えたことも起因している。西安の環状線もオートバイの通行が全面禁止となっていた。

とにかく市内の片側3車線の道路は車という車で溢れかえっていた。

もはや市民が人民服で自転車に乗っている光景はここにはなかった。



西安市内を発って約1時間、市内から40km以上離れた郊外の兵馬俑博物館に到着。開館時間より若干早く着いたのだが、すでに大勢の観光客が順番待ちをしていた。さすがは西安で最も人気のある観光地である。



## <世界遺産「兵馬俑」視察>

[世界遺産の保存とそれを活用した観光誘客促進施策について調査]

「兵馬俑」は、“二十世紀最大の発見”、“世界八大奇跡”と呼ばれ、始皇帝陵の一部として1987年にユネスコの世界文化遺産に登録された中国の歴史的財産である。

今般視察した「兵馬俑博物館」は、1974年に地元の住民により発見されたこの「兵馬俑」を保護するために、発見から5年後の1979年に建設された博物館である。今回の訪問団のメンバーでも過去に当地に来訪した経験者が多かったのだが、訪れるたびに施設や設備が様変わりしているとのことで、驚いた様子だった。

中国には数多くの観光資源が存在し、この「兵馬俑博物館」も毎年百万人の観光客が訪れている。増加する観光客に合わせて行政の周辺へのインフラ整備も急速に進められている事がはっきり認識できる。例えば、入口ゲートから主要施設まで1km近く離れているため、ここに電動カートを設置して利便性を高めることで、訪問者へのサービス充実に努めている。このカートに乗り合わせて到着した博物館の敷地は、とてつもなく広く、まるで博覧会の会場のようなであった。日本の約26倍の広大な国土を有効利用できる強みである。



博物館には1号坑から3号坑まで3つの坑があり、総面積は2万平方メートル余。敷地には、それ以外の施設も多数あり、それを合わせるといったいどれくらい広大なのか想像もできない。

最大規模の1号坑は総面積1万4千平方メートル余、兵馬俑の数は約六千体もあるというからただただ圧巻である。

【その他、現地での説明は以下のとおり】

- ・本来、兵士の手には実戦用の武器を握っていたのだが、柄が木製であったため朽ちてしまい、金属部分のみが周りに落ちていた。
- ・危険な前方の兵になるほど身分が低いため、鎧等の武装が簡素となっている。ただし前衛で功績を挙げれば後ろの部隊に回ることが許されていた。なお、後方の護衛隊はまだ発掘が終わっていない。
- ・兵士の顔はすべて違っている。色も付いていたが褪せてしまった。

・兵士より馬が小さく見えるのは、当時の甘肅省の馬が小さかったからである。私たちが見慣れている現在の馬は、シルクロードの交易後に西から入ってきた汗血馬（血のような汗を流して走る馬）が進化したものである。秦の時代の馬はまだ小さかった。

・兵士と馬の間に空間があるのは、元々この位置に戦車があったからである。これが木製だったため腐ってしまい現存していない。

・始皇帝陵のお墓の真下は現在も未発掘となっている。兵馬俑坑と違って埋葬品のレベルが非常に高く、多くの宝石や水銀があることしかわからない。

・兵馬俑は死後の世界へ一緒に連れて行くためにつくられたのだが、その埋め方は、まず通路の間に兵馬の倍くらいの高さの土塼を作り、その上に丸太を置いた。その上に箆を敷いて、さらにその上に土を叩いて固めて高さ2メートル程度の土盛りをした。その地盤の上に阿房宮を建設し、通路側には兵馬俑を並べた。その後歳月が流れて、丸太も箆も腐ってしまい支えがなくなった土が崩れてしまった。現在は立て直して修復しているが、土塼と兵が同じ高さになっている。

1号坑の奥側はまだ崩れてバラバラの状態になっており、今も発掘作業が進んでいるが、修復されずそのままの姿となっている。

Q：始皇帝は何のために兵馬俑をつくったのか。

A：当初、秦の始皇帝はそれまでの殉死制度のように生きた人間を埋葬するつもりであったが、長い戦乱と万里の長城や阿房宮、始皇帝陵の建設に膨大な費用と労働力をつぎ込んでおり、このままだと反乱のおそれもあるとの重臣の勧めもあり、生きた人間と同じだけの等身大の埴輪を埋めることにした。これは息をしない人間と同じものであるという考え方から、顔や表情がすべて違ったものとなっており、当時は人間そっくりに色も塗られていた。

まだ色褪せしていない何体の兵馬俑は、観光客の目の届かない別の場所で嚴重に保存され続けている。その管理はたいへんなもので、毎日ドイツ製のスプレーをかけて湿度、温度を保っている。ただ、それでも色褪せは進んでいる。



日本の古墳にある埴輪とはスケールが違い過ぎる。まさに世界遺産ではないだろうか。

当日、三つの坑と文物陳列館を施設化した兵馬俑博物館は観光客で溢れかえっていた。特にここでは外国人観光客が目立っていたが、110元という高額な入場料にも関わらず、こけだけの誘客を実現しているのは、まさに世界で唯一、中国でも西安でしか観ることができない魅力ある場所だからである。また、年間百万人の観光客から得られる経済効果も大きく、好循環によってさらなる設備投資やサービス向上も図られる。このように、世界遺産を利用した集客による観光施策は、ひとつの成功例としてたいへん参考となった。

西安空港までの移動の途中、やはり西安で人気の観光地である「華清池」(かせいち)を視察した。「華清池」は西安から東に約30km離れた西周時代からの温泉地で、唐の第6代皇帝玄宗が華清宮を造営し楊貴妃と過ごした場所である。現地では玄宗皇帝や楊貴妃が使用した珍しい風呂跡の多くを見学することができるほか、観光客向けに有料の「足湯」などが用意されており、多くの観光客が順番待ちをしていた。



「兵馬俑」が多くの外国人観光客で賑わっていたのに対し、こちらは中国国内の多数の観光客が入口から溢れかえっていた。

敷地は約8万5千平方メートルと広大であり、なかなか短時間ですべての施設を見学することはできないだろう。

高速道路を利用し空港へ。途中、城壁のような巨大な料金所に圧倒されつつ、西安咸陽国際空港へと急いだ。

到着時は夜間だったこともあり、じっくりと観察できなかったが、昼間眺めると、中国西北地区最大の



交通の要所と公言するだけに、なかなか大規模な空港であった。年間旅客量は1千万人超とのことで、多くの人出で賑わっていた。西安から上海への移動も同じく中国東方航空の国内便にて約2時間のフライト。古都西安からあつという間に大都会の上海へ。

## <上海在住の地元企業との意見交換会>

[中国の直轄市で世界有数のグローバル都市である上海の経済情勢と分析のため現地在住の石川県企業と意見交換会を実施]

### ■現地進出石川県企業等出席者の自己紹介

|                    |      |    |    |
|--------------------|------|----|----|
| 小松精練株式会社上海事務所      | 代表   | 山田 | 樹  |
| P F U (上海) 計算機有限公司 | 副総経理 | 真田 | 清司 |
| 伊祥雅商貿(上海)有限公司      | 副総経理 | 伊勢 | 寿子 |
| 製造販売業(小松市出身)       |      | 中田 | 薇薇 |

### ■石川県議会訪問団の自己紹介

#### ■石川県議会中国訪問団長木本議員のあいさつ

今回の訪問視察の目的は、江蘇省人民代表大会との交流が一つ、さらに西安から高速道路を4時間くらいかけて山の方へ向かった洋県でトキを観察することである。本県のいしかわ動物園にもトキはいるのだが、野生のトキは洋県でしか観られないということで、はるばる行って参りました。現地では田んぼの畦道を歩きまわって間近でトキを観ることができ感激した。そして最後の目的がみなさんとの意見交換会である。これが訪問の最後の夜であり、最後の仕事でもあるが、この場を借りて、上海の現状や進出後の苦労話や課題など大いにご意見を交わしていただきたい。最後に、みなさんの上海でのご活躍を祈念するとともに石川県のために今後ますますのご尽力を期待したい。



### ■意見交換の主な内容(現地での課題等)

- ・上海市内の再開発のペースが速すぎて驚かされる。周辺のあまりの急速なインフラ整備に戸惑うことさえある。極端な例では1週間で道路が完成したこともあった。
- ・円高が従業員の賃金に大きな影響を与えており、かなりの雇用負担を強いられている。
- ・中国人は愛国心は強いが愛社精神はあまり感じられず従業員教育が難しい。また、すぐに転職してしまう従業員も多く、特にサービス業などの第3次産業へ転職してしまう傾向にある。
- ・中国は法改正のスピードが早い。今月15日から外国人就労者に社会保険への加入を義務付けるよう社会保険料制度を改正したが、

このままでは日中両国での二重払いが発生してしまうことになり、その対応に苦慮している。一刻も早く二国間協定の交渉を進めて、負担を軽減してほしい。



#### [Q & A]

Q：円高は売り上げにも影響が出ているのか。

A：本社はたいへんであるが海外は逆に売り上げが伸びている。またドルやユーロに対しては元高になるので、その辺りは日本への輸出でカバーしている。

Q：上海の生活はいかがか。日本人が海外で長期滞在する都市は上海が最多とのことだが、どちらの言葉を使う機会が多いのか。

A：上海では家族で赴任するビジネスマンのための日本人学校が小学校から高等学校まで用意されている。なかでも小学校は二校あるのだが、その一校は1,500人のマンモス校になっている。それだけ多くの日本企業や日本人が滞在していることになるのだが、それらは推計で約7万人にのぼるときいている。

なお、滞在中に話す言葉は、やはり日本語より上海語、中国語を話す機会が多い。

Q：中国語を話せるから上海に赴任したのか。

A：上海に来るまでまったく話せなかった。上海には日本語が通じる飲食店も多く、社内語も日本語だったので、さほど不都合はなかったが、滞在して3ヶ月経過して余裕が出てきた頃に中国語の学校に週一回程度通い始めた。その後、約1年で日常生活程度は話せるようになり、意思表示はかなりできるようになったが、ビジネスとしてはまだまだ支障がある。そのうえ、上海では上海語が主流である。中国の標準語と上海語はまったく違う言語である。

Q：それだけ多くの日本人が上海に滞在しなければならないのは、直接こちらでマーケットしなければならない理由があるからなのか。

A：日本でつくると高価になってしまいマーケットができない。中国でつくって中国で売ること、国内需要を満たさなければならない。

また、現地生産や現地決算であれば円高の影響も受けない。

#### [その他]

・1999年に新空港の上海浦東国際空港が完成したが、以前からの国際空港である上海虹橋国際空港も随分ときれいに改修し、アジア最大のハブ空港を目指している。

- ・浦東国際空港は地下鉄のほかリニアモーターカー（磁気浮上式鉄道）も走っていて便利である。
- ・タクシー事情がよくない。雨が降ったらほとんどタクシーがつかまらない。
- ・地下鉄は世界一の長距離軌道となった。ダイヤはほぼ時間どおりに動いている。



上海は巨大マーケットとしてたいへん魅力的な中国最大の商業都市である。そこは日本人が世界一多く滞在する都市でもある。上海を拠点にマーケット事業の拡大を目論む日本企業の進出もめざましく、本県からも今回意見交換に参加していただいた小松精練株式会社さん、株式会社PFUさん、伊勢屋（iseya）さんをはじめ20社の企業が上海市に海外進出を果たしている。

上海万博終了後も景気は依然として上昇傾向にあるのか、上海の街並みを眺めると道路や交通機関のインフラ整備や高層ビル等の建設ラッシュは続いており、地価や家賃相場も上昇し続けているという。

#### ■江蘇省人民代表大会常務委員会・外事委員会郭敏文委員のあいさつ

今回の視察は、短い期間でのハードな日程にも関わらず、円満に目的を達成できたことは喜ばしいことである。江蘇省人民代表大会との友好交流においても成果があり、西安から4時間バスに揺られながら野生のトキに出会えたことも幸運なことであった。

「一回生、二回熟」という中国のことわざがある。今回の訪問団のみなさんとは初対面であり、ここにお集まりの企業のみなさんとも初めてお会いしたのだが、一回目に会ったときは他人だったが、二回目からは古い友人になれるという意味である。

今回の訪問がきっかけとなって石川県と江蘇省の友好関係・友好協力がますます深まることを心から願っている。

江蘇省は上海の奥座敷と呼ばれているので、仕事は上海で頑張ってください、お暇がありましたら江蘇省でゆっくり過ごしていただきたい。

## ■石川県議会中国訪問副団長山根議員のあいさつ

今回の中国訪問はたいへん短い日程ではあったが、非常に有意義な時間を過ごすことができた。また、この視察を通じて江蘇省と石川県とのつながりがとても深いということが理解できた。今後ともお互いのさらなる発展に向け頑張っていきたい。



今回の中国訪問は、無農薬で牛を使って農耕を行うような自然農法地帯の洋県から高層ビルが建ち並ぶ大都会の世界都市上海まで、短い期間ながらも広範囲に見聞したわけであるが、約960万キロ平方メートルの広大な面積を誇る



中国という国家が高度成長期の真っ直中であることを直に感じられた有意義な視察であった。(その顕著な例として洋県の田園地帯でも携帯電話が圏内であり通話が可能であった。携帯普及率の分析でさえ中国の驚異的な発展を垣間見ることができるのである。)

最後に、江蘇省人民代表大会常務委員会の委員の皆様をはじめ、同行していただいた郭敏文委員、張宏さん、そして視察先での現地の説明員の方々やお世話いただいた多くみなさんに感謝するとともに、これからも石川県議会が江蘇省はじめ中国との友好の架け橋となるよう、関係構築に尽力していくことが重要であるとあらためて認識した。

平成23年10月27日(木)

快晴の上海を出発し、中国東方航空MU557便で小松空港に到着。

## 石川県議会議員中国行政視察訪問報告書

石川県議会議員 木本 利夫

### ◎新幹線

和諧号（仲良く団結の意味らしい。江蘇省人民代表大会の議場にも、共創和諧のキャッチフレーズが、掲げられていた）に上海～南京間を乗車した。

浙江省での新幹線事故の後だけに、少しおっかなびっくりな所もあったが、列車は意外に静かでスムーズな運行であった。以前は370～380km/時で走っていたらしいが、事故以来、約300km/時にスピードダウンしての運行の為、今まで1時間半位で南京に着いていたのが、1時間40分から2時間近くかかるようになったらしい。しかし、安全第一で、以前は高速道路で4～5時間かかっていた事を思えば、雲泥の差である。ただ、スケジュール協議の時、ホテルに入るのが非常に遅いのが気にかかっていたが、それも、我々自身は新幹線で南京に着くが、我々のカバンは高速道路を経由して南京に着く為、ホテルにカバンが着くまでチェックインができないからであった。

車内は立っている人（座席のない人）もいて、快適な乗心地とは言えなかったが、便利になったことは間違いない。

### ◎秦推河

ホテルのチェックイン待ちの時間を利用して、新しい観光コースとして以前紹介され、利用後に感動を覚えた遊覧船による秦推河ナイトツアーについて調査をした。

これはライトアップされた南京城周辺の河や堀を周遊するもので、イルミネーションで色どられた名所旧跡はたいへん素晴らしく、新しい観光地創造への意気込みが感じられた。

### ◎総統府

1911辛亥革命により清朝を倒し、12年1月孫文が中華民国を臨時大総統に就任して、共和制を宣言した場所として有名で、今年、辛亥革命100周年として作られた映画「1911」の舞台としても使われた。

5年前から歴史教育と愛国主義キャンペーンの一環として一般公開されたこともあり、新しい観光地としてたいへん賑わっていた。



### ◎江蘇省人民代表大会

約800名の委員で構成され、その内より選ばれた64名の常務委員により運営されている。省トップの書記が主任を務め、その下に数名の副主任が任命されており、今回、我々を接遇してくれた丁副主任もその一人である。又、我々を上海に出迎え、最後まで随行してくれた郭外事委員は常務委員の1人である。

江蘇省人民代表大会との交流は、正に、各地区より選ばれた委員との交流であり、それを選出した人民との交流に直結し、大変重要な交流であると認識している。

### ◎トキ

今回の訪中の一歩の目的であり、日本や中国に数多く生存したトキが、日本でも絶滅し、段々追いつめられ、稲作の北限といわれる秦嶺山脈の南側にわずか7羽生存しているのが、国連の調査により1981年に判明し、現在、1,800羽を越える繁殖に成功した奇跡を目の当たりにして来た。

秦嶺山脈の北側は砂漠地帯であり、正に、土俵の俵で踏み止った感じである。西安より約420km離れた洋県は、昔の日本の農村を見るような所で、大勢の人も生活しており、トキが人々の生活の中に溶け込んで、生存しているのを見て、世界農業遺産に指定された能登でも、人々の協力により、トキの生息地となれる事を実感した。

トキの為に多くの努力と愛情を注いでいる洋県の人々に敬意を表すると共に我々も石川の里山にトキが生息できる様、努力しなければならないとあらためて感じた。

### ◎海外進出企業

どこにいても厳しい経済環境は変わらないと思ったが、右肩下がりの日本と違い、右肩上がりの中国での経済活動に一筋の光を見た。海外に進出している企業や人々との情報交換と県としてのサポートの必要性を痛感した。

また、県上海事務所の頑張りも改めて認識したところである。

### ◎上海の青空

今まで、何度も訪れた上海であるが、今回は上海万博の環境整備の影響からか、久しぶりに上海の青空を見て、中国の環境政策が徐々に成果をあげているなど、感じた。

以上

## 石川県議会議員中国行政視察訪問報告書

石川県議会議員 山根 靖則

4泊5日の中国視察である。上海駅から南京駅までは「新幹線」。例の追突、転落事故を起こした電車である。が、そんなことは全く感じさせなかった。私たちの指定座席の周りも、多くの中国人家族客が乗り降りして、大事故が起きたことなど「無かった」「忘れた！」という感じであった。夕方17時20分に乗車したが、上海駅は節電？を思わせる薄明るさであり、街のネオンもアパートの窓の明かりもほとんど目立たず暗かった。煌々と電気を「万灯」にしているのは原発事故にも懲りない日本だけか？

今回の視察では、中国側における行程の世話は、県とのかかわりの深い江蘇省人民代表大会が行うというところがこれまでと違う。そのために江蘇省人大外事委員会から、委員の郭さんと張さんの二人が同行した。それで省都南京では江蘇省人大常務委員会を表敬訪問し、丁解民副主任らと会い、歓迎宴で昼食をごちそうになった。丁副主任は相当の権力者らしく、出てくる料理の手が込んでいた。普通の野菜でも調理の仕方や味付けが良かった。1990年頃に石川県へ農業研修に来ていたという沈建輝農村工作委副主任が隣の席となり、日本語が通じて話が弾んだ。

張さんが今回の視察のために作ってきてくれた「联系人（連絡員）一覧表」や「江蘇（Jiang Su）」がとても参考になった。事務局として私たちのために頑張ってくれたのだと思った。

翌日、陝西省の洋県へ行き、野生に放たれているトキを見た。3年前にできたという西安から成都へ抜ける高速道路を走ったのだが、険しい岩山を開いた片道2車線の広い道路で、韓国的高速道路が舗装の技術が悪くマイクロバスがガタガタしたのに比べ、中国のほうは技術がいいのか滑らかに走る。長いトンネルも谷間にかかった高い橋脚の橋も無事に走り終えた。安全管理の危惧を忘れさせた。

洋県は山の中と思いきや、盆地のような地形で丘の上もずっと畑が作られている農村だった。トキの住んでいるあたりは周囲10キロ余りの広さで、無農薬農業を実践しているということで、多くの人たちが牛や

人力で畑作業をしていた。ネットで覆われたトキの保護センターもあったが、野生のものは農民の中に見守ってくれる人たちがいて、お互い携帯で連絡を取り合って私たちをその場所へ連れて行ってくれた。トキは田んぼで普通にえさをついばんでおり、追いかけているのは私たちだけだった。こんな景色が当たり前に戻るまでには、私たちの石川県でどれくらいかかるだろう？無理かもしれないと思った。

最終日の日程に上海市並びに江蘇省に進出している石川県出身企業との意見交換会があった。出席者には、小松精錬（株）上海事務所代表の山田樹さん、P F U（上海）計算機有限公司副総経理の真田清司さん、そして前にもお会いしたことのある小松市出身の伊勢雅商貿（上海）有限公司代表の伊勢利子さんが予定されていた。

伊勢利子さんは、小松市にある1920年創業の呉服屋「伊勢屋」の女将さん。子育てが一段落し自由な時間を過ごしたいと2002年上海に留学。2～3年で帰国するつもりが活気あふれる上海に魅了されビジネスを始めることを決心。2003年にオフィスを開設し、2006年には「iseya」ブランドを立ち上げ。そして2007年、秦康路に和服素材を利用したオリジナルのアクセサリー、バッグ、雑貨などを扱う店舗「iseya」をオープンした。現在は息子さんが前面に立ち、人民広場にある大型ショッピングモール来福士の店舗と2008年11月末にオープンした南京東路ショッピングモール353広場の店舗を展開している。

上海には私の20年来の友人、顧薇薇（中田薇薇）さんがいる。彼女も上海と小松（日本）を行き来して、細幅織物の商標タグなどの製造販売を中心に活躍している。上海や江蘇省など石川県とかかわりのある人たちとの交流ならば、彼女もその場に出てもいいのでは？と声をかけてみた。県議会事務局や石川県上海事務所の配慮で、この薇薇（びび）さんも意見交換会の席に加えてもらい、今後も県との間で経済文化交流の一端を担ってもらおう約束を交わした。

意見交換会が終了後、引き続き懇談を続けたのだが、内輪？になって話しやすくなったのか「日本政府の対応は全く遅い！」と伊勢さんは憤慨した。「ドイツや韓国からきている人たちはとっくに本国と中国政府との間で対応しているのに、日本政府はやっと動き出した程度。」という。その問題というのは、上海市が打ち出した外地人「城鎮保険」加入義務化問題である。

中国はこの9月から居留許可を取得して中国で就業している外国人（家族、留学生は対象外）に対して社会保険料を徴収する制度を公布し、この10月15日から施行したところなのである。伊勢さんたち日本人は、日本でも社会保険に加入しているのに中国でも加入となれば、二重の負担となる。また、家族は対象外なので、日本の健康保険などを中断して赴任している駐在員の扶養家族は、日中両国の社会保険から漏れることになる。問題を事前察知したドイツや韓国は02年03年、すでに中国との間で2国間協定を結んで社会保険の二重負担を防ぐ措置を取っている。けれども日本は対応が間に合わない。ことほど左様に、日本を離れてみると日本政府の対応の鈍さが見えてくるといふ。

しかし彼女たちは日本（石川県）と中国（上海）との間で一身をなげうって働く覚悟だと強調した。自分たちはボランティアで働くから、これからもどんどん声をかけてほしいといっていた。たくましい上海女性たちとの再会だった。

中国から帰ってきた日のニュースで、日本の駐中国大使館のオープンができなくなっているというのが出ていた。完成した大使館の面積が設計と違っているからと、許可が下りないというのだった。上海の女性たちの言うとおりに、日本政府の外交、特に近隣諸国に対する目配り、心配りがなっていないから、こんな小さなことでケチをつけられるのである。アメリカばかりに目を向けるのではなく、「アジアの一員」の姿勢が必要である。

（文責・山根靖則）

## 石川県議会議員中国行政視察訪問報告書

石川県議会議員 新谷 博範

10月23日、同月二回目の海外視察である。今回は、県議会単独視察であり、石川県の友好行政地、江蘇省を訪問しながら、トキの飼育と現状を把握し、今後の石川県のトキ飼育のあり方を検討する事を目的とする。

13:30小松発、15:00上海浦東空港着、すぐに上海駅に向かい、高速列車にて南京に向かう。超過密移動、南京到着は、19:20、夕食に向かい、1時間で夕食すぐに秦淮河見学。

南京が水に恵まれ濠に囲まれている事がよくわかる。堀の高さと接続距離約40キロメートルは世界一のことである。

あまりに巨大であり、その製作に毎日百万人を動員し30年かかったそうである。当時は、60キロメートルあり、北京の紫禁城の原型が作られたそうである。

10月24日、朝、南京臨時大統領府視察、9:50世界遺産明孝陵視察、あまりに広く、門から、その墓のあるところまで徒歩で行かなければならないとのこと。その距離歩けない距離、因って、参道のみであきらめ、広さを図で見て退出。

11:00江蘇省人民代表大会常務委員会表敬訪問、友好交流地域として交流を深めてきたが、福岡県と大阪府には劣る、準友好地域であることがわかる。

江蘇省の副総理級の方から他の友好県と同様に手続きをとることが求められ、日中関係の国際問題にかかわらず、早急な対応が必要である。

会談は、友好的に終わり、中華人民共和国の政治制度の一端を垣間見た。要するに、すべての行政機関は中国共産党の支配下にあり、その承認無くして行政は機能しないという基本的な事である。

12:00、江蘇省人民代表大会常務委員会主催で歓迎の昼食、今まで食べた中華料理で、最高の味と格式があった。中華料理の奥行きの高さと特級料理人の腕には、舌を巻くというのが実感である。

その後、南京城壁視察後、西安に向かい、18:30西安着、餃子の発祥地であるだけに、餃子尽くしの夕飯、餃子が主食とおかずを兼ねている事を知り、改めて文化の違いを理解する。

翌日、専用車にて、トキを求めて洋県へ出発。洋県は、人口約40万人、想像とははるかに違う普通の街であった。田舎ではあるが、人通りも多く、経済活動も活発である。トキは、半径10キロメートル圏内で放鳥されていて、すぐに見つかるくらい飛んでいる。トキは、この地域ではふつうの鳥であり、地元の人も特に気に留めている感じはなかった。我々が何をしに来たのかのほうで地元の人々には不思議である様子である。

トキ保護センターに向かい、直接どの様に飼育されているのかを視察する。驚いたことに、トキ保護センターと言っても、サーカスの会場ごときのものであり、それほど建築費がかかるものでないことはすぐに理解できた。又、その管理体制たるや誰でも入れるようになっていて、管理人さえ見つけるのに容易ではない。要するに、管理に手間暇をかけていないということである。この様な簡易な管理体制で生きていけるものならば、石川県で作るのはそんなに難しい事ではない、率直な見解を持った。

加えて言うならば、そんなにトキ、トキと騒ぐ日本人の愚かさと環境保護の大切さ、何に価値を置くのか議論していない我々の行動そのものがばかばかしくさえも感じた。とにかく、トキは普通に飛んでいる、少し動きの鈍いピンク色の鳥である。警戒心は強い鳥ではない、簡単に捕獲できると感じた。

西安に戻り、大慈恩寺を視察、かの有名な三蔵法師由来の寺院である。中国国内観光の一大拠点と化しており、以前訪問した時とは雲泥の差である。きらびやかなネオンに因るライトアップ、観光客相手のお店やトイレなど衛生状態は、飛躍的に改善されている。

10月26日、西安の秦の始皇帝陵墓、兵馬俑を視察。

その巨大さと精密かつ高度な技術により作られた数々の遺物を目にし、圧倒的な力を感じた。はるか2,000年以上前から、この様な陵墓を作る中国の悠久の歴史には感服するしかない。

以前も訪れた事があったが、ここも観光拠点となり、以前のように車で近くまで行く事は出来なくなっていて、観光客を的確に回らせる手配・構造になっていた。時代は非常に早く変わってきている。もし、秦の始皇帝の陵墓が全面公開されるならば、世界中の人々が押し寄せるであろう。説明によれば、現在の保存技術では、掘り返し展示することは難しいとのこと。観光資源にあふれる中国の眠れる観光大国の一端を垣間見る。さぞやエジプトのピラミッドに匹敵するであろう。

その後、楊貴妃と玄宗皇帝の湯治場を見学、午後は移動に費やされ上海に到着。現地進出石川企業と懇談会。中国の現状と中国国内での企業経営の厳しさを拝聴する。

海外進出には、用意周到であることが肝要。

10月27日、上海から小松に帰国。いつもながら、慌ただしさのみがあり、観光ではないが視察を兼ねた買い物時間さえもないタイトな視察であった。

以上。

# 石川県議会議員中国行政視察訪問報告書

石川県議会議員 増江 啓

10月23日(日)

11:00 小松空港役員室にて結団式

木本団長より「仲良く無事故で実り多い視察を」と、山根副団長の発声で出発

13:30 小松発 上海浦東空港行き MU558便

15:00 上海浦東国際空港到着

15:40 専用車(マイクロバス)にて空港から上海駅に移動

現地随行の江蘇省人民代表大会常務委員会外事委員会 郭敏文委員、外事委員会辦公室 張宏さん、JETRO、石川経済交流部長の小田さんらの出迎えを受ける。車窓からの上海は万博で整備された高速道路、2,300万人が住む世界一の町は高層マンションが林立し圧巻。

16:45 上海駅到着

17:20 高速列車G7072 中国新幹線にて南京に向かう。

7月23日に浙江省温州市で起きた列車衝突事故の処理対応が問題となったところ。列車のシートの汚れがひどく、乗降客のマナーもあまり良くなく、あまり心地よい高速列車とは言えない。

19:20 南京駅到着

19:40 夕食

20:40 遊覧船にて秦淮河を視察

秦淮河は夫子廟の南側にある南京の歴史とたいへん縁がある川である。昔は淮水と呼ばれていたとのこと。

紀元前210年、秦の始皇帝が中国を統一後、南京へ訪れたときに、現地の地勢が雄大なことから自分を倒すような王がここから出るに違いないと危機感を覚え、王の出る風水を壊すために、この川を開削して堀を作ったことから「秦淮河」と呼ばれるようになったとのこと。



周辺には、白鷺洲や中華門、孔子廟をはじめ名所旧跡が至る所にあり、観光地としては充実している。また、夜間においてもライトアップが煌々として秦淮河の川面に映える景色は素晴らしいものである。これら徹底した観光地化戦略のスケールの大きさには度肝を抜かれたというのが率直の感想である。

21:30 宿泊先である金陵飯店にチェックイン

10月24日(月)

08:30 ホテル発

08:45 南京臨時大統領府視察

この「総統府」の建築については、まず、およそ600年前の明の時代に造られことが始まりであり、その後、1853年の太平天国時代ではここに朝廷を設立し、1912年1月1日、孫文氏がここで中華民国臨時大統領に就任している。さらに、1927年に蒋介石氏が南京で国民党政府を発足した後、「総統府」(大統領府)の看板を掛けたという長い歴史を振り返ることができる。

その後は抗日戦争を経て1946年終戦後再び国民党政府の「総統府」に戻ったとのこと。1949年、中国共産党毛沢東氏が率いる人民解放軍が「総統府」を占領してから二十世紀末まで江蘇省政治協商の事務所となっていたが、今世紀の始めから、歴史教育と愛国主義キャンペーンの一環としてまた復活させて現在に至っている。実にめまぐるしい歴史の渦に巻き込まれた史跡であると実感した。

09:50 世界遺産 明孝陵視察

明の太祖朱元璋の陵墓である明孝陵は、世界文化遺産に登録されている中国を代表する貴重な遺跡である。

この陵の参道は総延長1.8キロほどあり、以前は正門の「大金門」がその起点であったが、現在は、臣下が参拝のため馬や駕籠から下りるための門である「下馬坊」からの参道が整備されているため、ここから散策できるようになっている。大金門から「四方城」の門を潜ると、左右に6種12対の石像が配列されている有名な「石像路」がある。さらにその先の「翁仲路」を通り過ぎると、朱塗りのもうひとつの正門「文武方門」に辿り着く。朱元璋の墓はこの文武方門の最奥にあるのだが、未開のまま保存されており、今も皇帝が静かに眠り続けている。

## 11:00 江蘇省人民代表大會常務委員會表敬訪問

今回の訪問団の第一の目的である江蘇省人民代表大會常務委員會表敬、江蘇省と石川県は友好交流地域として交流関係を深めてきました。(1995年11月5日提携)江蘇省は中国大陸の東部沿岸地方の中心、長江の下流に位置し太湖をはじめ多くの淡水湖があります。

運河が網の目のように広がる南部は中国一の水郷地域。人口は約770万人で石川県の約65倍、面積は約1,026万km<sup>2</sup>石川県の約25倍、文化、芸術など本県と活発な交流を進めてきました。

今回の表敬は議会として更なる交流強化を図るためのもの。江蘇省人民代表大會常務委員會から丁副主任をはじめ各委員の皆さんの出迎えを受ける。

会見では丁副主任から人大を代表して丁重な歓迎挨拶、「30年以上の古い友人、石川県は故米沢外秋氏、谷本知事、金原県議が江蘇省榮譽公民を授与されている。」「東日本大震災のお見舞いを述べられ1日も早い復興、復旧を望む。」「強い絆でアジアの平和、世界の平和のために貢献していこう。」「江蘇省のいろいろな所を見ていってください。」とのこと。

木本団長が返礼の挨拶「熱烈な歓迎に対し心からの感謝、大震災もその後の原発事故も石川県には被害が無く安全・安心、中国からの日本観光が1日も早く震災前に戻ることを期待する。1976年、35年前の青年団としての初訪問から大切な友人としてお付き合いいただいている。感謝しこれからも日中友好の橋渡し役を果たしていきたい。」

## 12:10 江蘇省人大常委会主催で歓迎宴

## 14:15 南京城壁視察

市内中心部にあたる区域をぐるりと取り囲んで造られた全長約35kmの世界最大の規模を誇る南京城の城壁を視察した。ここは古代軍事史を知るうえでも重要な史跡である。1366年、明の朱元璋が都を南京に定めた後、全国各地から工匠、工夫として罪人などを百万人余りを使って建造させた城壁である。30余年の歳月を経て、1391年には土で固めた全長60kmの外郭を、2年後の1393年には城壁をすべて完成させている。都市部の中核を成しているのは紫金城で、現在は「明故宮」と呼ばれている。北京のものは南京を模して建造されたとのこと。

強風であったが、城壁の屋上から眺める街の景色は素晴らしいものだった。また、各所に兵士の人形や大砲を設置するなど、観光地としての楽しめる要素は多かった。

15:30 南京空港に到着

16:10 MU2895便にて西安へ移動

18:30 西安空港到着

19:30 懇親会

陝西省野生動植物保存協会の常秀雲先生、石川県華僑華人聯誼会の種事務局長とともに夕食をとらせていただく。先生のトキ保護のこれまでの活動を伺い明日の洋県視察に思いをはせる。種事務局長とは8月しいのき迎賓館で開催された「中国展」以来の再開。故郷での活躍を期待したい。常先生からNPO法人日中朱鷺（トキ）保護協会名誉会長の村本義雄さんとの深い友情を伺い感銘。

21:00 宿泊先である西安皇城豪門酒店にチェックイン

## 10月25日（火）

07:40 専用車（マイクロバス）にて洋県へ移動

高速道路等で約4時間、広大な中国の自然と農村地域を眺め都会との格差を感じる。

11:20 洋県にて昼食

山間地ということで食事の心配をしたが美味しくいただく。食事場所の招待所で給仕をしてくださった娘さんたちはアルバイトらしく食事後、自転車で帰っていく姿を見かけやはり、客人は我々一行だけの様子。

12:30 自然保護区とトキ保護センターを視察

特別天然記念物（1952）のトキ、国際保護鳥（1960）、環境省レッドリスト（野生絶滅）、種の保存法に基づく「国内希少野生動植物種」（1992）、ワシントン条約

野生のトキを観察できるよう現地のスタッフが手配をしてくださっていたおかげで、水田、川面で野生のときを発見。バスを降りて野生のトキをカメラに納めるべくあぜ道を進む。我ながら童心に帰る。それほどの感激。

その後保護センター内を視察、約100羽のトキがセンター内で飼育されている。

## 中国の保護活動

中国では1981年に7羽が再発見されてから、営巣地の監視・保護、エサ場の確保、人工飼育での繁殖など研究・増殖に取り組んでいるところである。野生の個体は、陝西省南部の洋県とその周辺に生息している。

また、陝西トキ救護飼養センター（洋県）、陝西省珍稀野生動物救護飼養研究センター（周至）、北京動物園（北京）などで人工飼育され、野生と飼育のトキをあわせてその数は約1,800羽になった。

野生のトキは、繁殖期と7月～10月にかけては活動範囲が広いので、その活動範囲内の道路や集落に看板を立てトキが保護鳥であることをアピールしたり、陝西省の愛鳥週間（4月11日～17日）にパンフレットやビデオを使って小学生向けのキャンペーンを行うなど、国民に普及啓発活動を行っている。

## 問題となっていること

### ・エサ場の不足

トキの生息に必要な水田が減り、さらに冬には水田を麦畑にしてしまうためエサ場が不足してしるとのこと。また、エサを購入するための資金の負担が増加している。

### ・生息環境保護のための規制

繁殖期から10月にかけてトキの活動範囲は、漢中地区の3,000平方キロメートルの広範囲にわたるので、生息環境保護のための規制をこの地域全体に適用するのが難しい。

### ・水質の悪化

農薬による水質の悪化で、トキの活動範囲内の水生生物が減っている。

## 日本国内の現状

1952年、特別天然記念物に指定されたが個体数の減少は止まらず、1970年には能登地方に残っていた1羽が捕獲され本州では姿を消した。その後、1981年に佐渡に残っていた5羽が捕獲され人工繁殖を試みたが、個体数の増加には至らなかった。

現在、佐渡トキ保護センター・野生復帰ステーション・いしかわ動物園、出雲市分散飼育センター、多摩動物公園などで飼育されており、また、新潟県佐渡島で試験放鳥が行われ、2008年には10羽、2009年には19羽が野生に放された。環境省は、2015年までに佐渡で60羽を野生に定着させることを目指している。

日本国内の飼育状況（2011年9月26日現在）

佐渡トキ保護センター 95羽（うち2011年生 15羽）  
佐渡トキ野生復帰ステーション 46羽（うち2011年生 11羽）  
多摩動物公園 14羽（うち2011年生 5羽）  
いしかわ動物園 21羽（うち2011年生 9羽）  
出雲市トキ分散飼育センター 14羽（うち2011年生 10羽）  
合計190羽

14：20 洋県から西安へ移動

17：40 大慈恩寺（大雁塔）

大雁塔は雁塔路南端の慈恩寺内に建っており、現存する古塔の中で最も有名である。古都の象徴とされ、西安市の徽章にもデザインされている。大雁塔の正式名称は「慈恩寺大雁塔」であり、創建は652年。樓閣式のレンガ造りで、隙間は漆喰で固められ、レンガ壁の上に角柱がのぞく、中国独特の伝統建築様式をとっており、周囲は曲江池に囲まれ、杏園、楽遊原などが整備されている。逸話によると、「三蔵法師」とも尊称された玄奘法師がインドから持ち帰った大量のサンスクリット経典や仏舎利などの宝物を安置保存するために自らが設計・指揮を執り施工したとのこと。大雁塔の構造は樓閣式のレンガ造りの塔で、高さは約64m、底辺は約25m、形状は四角錐となっている。底辺は42.5×48.5m、高さは4.2mのレンガ造りの土台に建つ。その造りは青レンガを漆喰で塗り固めた頑丈なもので、軒下には木造建築風の廊下があり、上へ行くほどだんだん細くなる。実際、塔内には木製の螺旋階段があって、上へ登ることが出来るのだが、今回は時間が無いため残念ながら上へは登れなかった。

19：00 西安市内到着 夕食会

21：00 宿泊先である西安皇城豪門酒店にチェックイン

10月26日（水）

07：40 ホテル発

08：40 兵馬俑視察

兵馬俑（へいばよう）は、本来は古代中国で死者を埋葬する際に副葬された俑のうち、兵士及び馬をかたどったものを指すのだが、現在では、

陝西省にある秦の始皇帝の陵墓周辺に埋納されたものを指すことが多く  
なっている。1987年、世界文化遺産に登録された。

発掘される前は、歴史書等に秦の始皇帝陵の存在は記されていたが、  
長きに渡る歴史の中、陵の位置どころかその存在すら忘れ去られてしま  
ったとのこと。漢書においては項羽に破壊されてしまったとの記述もあ  
ったぐらいである。

そんな始皇帝の兵馬俑が1974年に発掘されたのだから、世界中が  
驚かないわけがなく、またそのきっかけが畑を営む農民が井戸を掘ろう  
として偶然見つけたというからさらに驚きである。その発見者は現在、  
博物館の名誉副館長となっているが、残念ながら今回の視察ではお会い  
できなかった。

兵馬俑の発掘後も驚くことばかりだったらしい。例えば、これら兵士  
の俑にはどれ一つとして同じ顔をしたものはないことや秦の軍隊がさま  
ざまな民族の混成部隊であったこと、また、秦の敵国が存在した東方を  
向いて置かれていたこと、等々。当時の秦軍の装備や編成等が文献や史  
料以外で確認できたことは非常に意義があり、現在でも、調査・研究は  
続いているとのこと。

この兵馬俑を保護する現地の博物館に訪れることで、これら魅力ある  
世界遺産を間近で観察できることが可能となる。そこはまさに中国の歴  
史を肌で感じるができる迫力ある博物館といえる。

#### 10:45 華清池視察

華清池は西安から東に30キロ離れたところに位置し、唐の玄宗皇帝  
が楊貴妃とここで暮らして、温泉に入ったり、宴や歌舞に明け暮れてい  
た場所として有名な観光地である。ここでは玄宗皇帝や楊貴妃専用のの  
「蓮花湯」、「海棠湯」という浴室の跡地も見学できるようになっている。

唐の有名な詩人白楽天が二人を素材に「春寒くして浴を賜う華清宮、  
温泉の水滑らかにして凝脂を洗う」と歌った「長恨歌」は、ここを舞台  
にした有名な叙事詩である。園内には“世界4大美人の一人”楊貴妃の像  
が立っており、その前では多くの観光客（特に中国国内の男性）が順番  
に写真を撮っていたことが印象に残った。

#### 12:30 空港に到着、昼食

#### 15:00 西安空港発 MU291便

#### 17:05 上海浦東国際空港着

19:00 現地進出石川企業との意見交換会

PFU上海計算機有限公司の真田さん、小松精練株式会社上海事務所の山田代表、伊祥雅貿商貿上海有限公司の伊勢代表等と懇談、意見交換。意見交換では海外進出の苦労話、中国の法整備の現況などを伺った。スピードのある中国の発展で法整備が各省によって異なること、社会保障などの制度が緒についたばかりで不安も大きいこと、外国人の企業創業については厳しい規制があること等を学んだ。これからは富裕層向けサービス業が産業として発展していくのではないかとのことであった。

21:00 宿泊先である上海大廈にチェックイン

10月27日(木)

07:00 ホテルから空港へ移動

09:25 上海浦東国際空港発

12:30 小松空港着 解散

以上

## 石川県議会議員中国行政視察訪問報告書

石川県議会議員 徳野 光春

10月23日（日）

小松空港役員室にて結団式後、中国東方航空（MU558便）に搭乗し、上海浦東国際空港到着。

専用車（マイクロバス）にて同空港から上海駅に移動する。上海万博で整備された高速道路を走ると、途中、車窓から見えるのは、実際は4千万人が超える人々が暮らす世界の都市として、数えきれないほどの高層タワーが建ち並ぶ光景である。毎年成長発展しているのが間近に感じられた。数年後にはディズニーランドも上海に出来る予定で、開園すれば世界で12番目となる。

上海駅到着後、高速列車（G7072）中国新幹線にて南京へ向かう。この列車のシートはあまりきれいではない。また乗客のマナーも良くない。指定席であるにも関わらずリラックスはできない印象であった。車内も日本のように商品を売り歩きはないが、車両の一部で飲み物、スナック等の販売があった。時速は300km前後で速度を落として運航していた。本当はもっとスピードが出ると言っていたが、事故のために自粛していた。

南京駅到着し、市内で夕食、その後遊覧船にて秦淮河を視察した。秦淮河は夫子廟の南側にあり、昔は淮水と呼ばれていたとのこと。夜間においてもライトアップが煌々として秦淮河の川面に映える景色は素晴らしいものであった。

上海空港から荷物が陸送で到着するまで、2時間の余裕があり、十分な観光施設がある。道路幅も広く、夜間は細部の汚さも目に触れることなく幻想的な風景が堪能できる。

午後9時半に宿泊先である金陵飯店にチェックイン

10月24日（月）

午前8時半にホテルを出発し、まず南京臨時大統領府を視察する。

大統領府があったこの地は、約600年前の明の時代に建築が始まり、その後、1853年の太平天国時代には朝廷をここに設立していた。また、1912年1月1日には孫文氏がここで中華民国臨時大統領に就任して



いる。

辛亥革命100年ということで、日本人が観光をしてもおおきなトラブルはないように感じた。それは孫文をバックアップした友人に日本人が関わっていたからである。

次に世界遺産の「明孝陵」を視察した。ここは明の太祖朱元璋の陵墓であり、2003年に世界文化遺産に登録されている。この陵の参道は総延長1.8キロほどあり、参道が整備されているため、ここから散策できるようになっている。さっそく左右に6種12対の石像が配列されている有名な「石像路」を歩いてみた。やたらに、広いので、憩いの場としては良いが、全体を見るにはやはりバスが必要であると感じた。

基本的に権力者の墓地であり、日本の古墳をさらにスケールアップしたものといえる。

明孝陵を視察後、江蘇省人民代表大会の常任委員会を表敬訪問した。今回の表敬は江蘇省と石川県の友好交流関係をより一層深めるため訪問団の第一の目的としていた。江蘇省人民代表大会常務委員会から丁副主任をはじめ各委員の皆さんの出迎えを受け、会見では丁副主任から歓迎挨拶、木本団長から返礼の挨拶があった。1時間余の会見後、江蘇省人大常委会主催で歓迎宴があった。中華料理を頂く。器がすばらしく、褒め称えたら、皿を頂いた。フランス製であった。さらに歓迎宴では、中国の経済情勢について話し合ったところ、経済発展に少し陰りを感じているようで、金融の面からの倒産があり、新規企業誘致等、経済、雇用について多くの話を聞かせていただきました。

午後からは市内中心部にあたる区域をぐるりと取り囲んで造られた全長約35kmの世界最大の規模を誇る南京城の城壁を視察した。

南京に関しては、反日感情が強いものと思っていましたが、国民が豊かになっていく途上では、それらのことにはふれず友好的に感じられました。

互いの立場を認識し、文化の違いがある中にも、尊重しあえる部分を見つけ出さなければいけない。

南京城壁を視察後、南京空港に向かい、MU2895便にて西安へ移動した。

西安に到着後、懇談会を実施した。

陝西省野生動植物保存協会の常秀雲先生、石川県華僑華人聯誼会の種事務局長とともに懇談しながら、常先生のトキ保護のこれまでの活動について詳しく伺った。

午後9時過ぎに宿泊先である西安皇城豪門酒店にチェックイン。夜の西安、あまりの寒さに隣の洋品店で、セーターと防寒着を購入した。中国製、デザインは良い。しかし、安いものを購入したので、縫製に難あり。さすがに冷え込む。

10月25日（火）

午前7時半過ぎホテルフロント前に集合し、マイクロバスにて洋県へ移動。

高速道路等を利用して約4時間の道のり。車窓から広大な中国の自然と農村地域を眺め都会との格差を感じる。渓谷が深く、大自然を間近に感じ、途中の山間に点在する民家を眺めると、どうしてここに住まねばならないのか？雇用はないので自給自足の生活なのかと、しみじみ考えさせられた。

洋県に到着後、昼食。200人は入れる食堂だが、普段は結婚式にでも使用しているのかと想像する。客は我々一行だけの様子、夜は地元の人が来るのか？食事場所の招待所で給仕をしてくださった女性たちはアルバイトらしく、また日本人が珍しい場所のように感じた。はにかんだ様子から都会と田舎という感じが漂っていた。給仕後、女性たちは自転車やバイクで帰っていった。

昼食後、トキ自然保護区とトキ保護センターを視察した。

野生のトキを観察できるよう現地のスタッフが手配をしてくださっていたおかげで、水田、川面で野生のトキを発見し、バスを降りて野生のトキをカメラに納めるべくあぜ道を進むが、すぐに飛び立つ。トキが飛び立ち空からの光に透かして見れた瞬間、天女を彷彿させた。

その後、保護センター内を視察、約100羽のトキがセンター内で飼育されていた。

ここは石川県内でいえば辰口の岩内町のような感じ。川があり、水田が広がる。ただし、規模は必要であり、日本ではやはり佐渡でないと無理なのかもしれない。さらに無農薬にすればえさ場の確保が難しそう。

トキを視察後、洋県から西安へ移動。途中、大慈恩寺（大雁塔）を視察した。大雁塔は、創建は652年で慈恩寺最初の方丈でもある三蔵法師が、インドから持ち帰った大量のサンスクリット経典や仏舎利などの宝物を安置保存するために施工したものである。ご本尊に金箔をはってあるのかどうかまではわからないが、金色で目映いばかりであった。写真撮影も可能ということで、思わずシャッターを切ってしまった。夜間

もライトアップされ、幻想的な大伽藍であった。

大雁塔を視察後、西安市内で夕食会。その後、午後9時過ぎに宿泊先である西安皇城豪門酒店にチェックイン。

#### 10月26日（水）

4日目、兵馬俑を視察。兵馬俑は1987年世界文化遺産に登録されている。規模の大きさ、埋蔵品の多さ、修復技術に感嘆する。破片を組み合わせるため3Dコンピューターを駆使していた。兵士は2mぐらいの背丈で、実際の当時の人物より、大きく制作してあるとのこと。歴史好きでなくても、一度は訪れたい場所である。

続いて華清池を視察。ここは唐の玄宗皇帝と楊貴妃と一緒に暮らした場所として有名な観光地である。園内には白い楊貴妃の像が立っており、その前では多くの観光客が訪れていた。

西安は、日本の奈良以上に歴史を感じさせられた場所であり、すばらしい観光資源の宝庫である。また、金沢とは違い、道路巾があり、大型観光バスでの観光もしやすい。

西安空港に到着し、昼食後、MU291便にて上海浦東国際空港へ。

上海市内に移動し、現地進出石川企業と意見交換会を実施。

PFU上海計算機有限公司の真田さん、小松精練株式会社上海事務所の山田代表、伊祥雅賀貿商貿上海有限公司の伊勢代表等4名と懇談し、意見交換をした。海外進出での苦労話や中国の法整備の現況などを伺った。外国人の企業創業については厳しい規制がある。上海は2年前に訪れたときより、更に変貌を遂げている。ありと、あらゆる分野において、チャンスがあるように感じられた。

午後9時過ぎ、宿泊先である上海大廈にチェックイン。ホテルの前を流れる大河ベリを歩きながら、夜景を見たとき、今後も上海は発展していくことを確信できた。

#### 10月27日（木）

午前7時、ホテルを出発し空港へ移動。上海浦東国際空港から小松空港へ。ここで解散。

小松空港からバスで金沢まで帰ろうと計画をしていたが、到着が遅れたのか、バスが1時間半後にしかない事がわかる。

私と中国人留学生の両親が時刻表をみて、啞然とした。飛行機で1時間半で上海から到着するのに、タクシーしか移動手段がないのか？両替は出来るのか？団体旅行か、ビジネス以外には小松国際空港は使用したくないと大半の外国人は考えるだろう。

以上

# 石川県議会議員中国行政視察訪問報告書

石川県議会議員 善田 善彦

1日目 10月23日(日)

・小松空港役員室で結団式の後、中華航空(MU558便)にて上海浦東国際空港に向かいました。

(小松空港での搭乗手続きはスムーズに行われましたが、手荷物検査のゲートでは、かなり込み合い長い列が出来て時間がかかりました。慌てて出国手続きを済ませ機内に乗り込む姿を多く見かけました。)

・上海浦東国際空港到着、現地随行の石川県上海事務所 小田陽児専門員、江蘇省人大外事委員会委員 郭敏文さん、江蘇省人大外事委員会 張宏さんの出迎えを受けて専用車にて空港から上海駅に移動しました。

(上海浦東国際空港は中国国土の大きさを感じる巨大な空港でした。入国の際には長い待ち時間もなくスムーズに入国ができました。上海は世界有数の世界都市であり、主に経済的、政治的、文化的な中枢機能が集積しており、グローバルな観点による重要性や影響力の高い都市で、同国の商業・金融・工業・交通などの中心の一つであります。2011年5月現在の常住人口は2,300万人を超えており、市内総生産は1兆9,196億元(約23.2兆円)であり、首都の北京市を凌ぎ同国最大であります。上海駅に移動中のマイクロバスの車窓から見え隠れする上海の巨大な街並みに大きな力強さを感じました。)

・上海駅到着、高速列車G7072 中国新幹線にて南京に向かう。

(数ヶ月前の高速列車衝突事故で、処理対応隠ぺい問題などで世界中の話題となった。新しい車両にも関わらずシート汚れがひどく、また、指定席でも席の取り合いになり乗降客のマナーもあまり良くなく、居心地よい旅ではありませんでした。)

・南京駅到着、秦淮河(しんわいが)へ移動し夕食後遊覧船にて視察。

(南京では、市内を流れる秦淮河を中心に古く六朝(りくちょう)の時代から栄えた繁華街と、大規模な科挙(かきょ)の試験場の跡地を総称して、夫子廟と呼んでいるようです。夫子廟は南京最大の下町で、夜になると、ライトアップが秦淮河の川面に映える素晴らしい夜景と、食事を楽しむ市民で賑わっておりました。小さな船で遊覧しイタリアにあるベニスの運河を感じさせました。石川県では観光名所となるナイトスポットが不足しており、北陸新幹線開業後の誘客政策の参考になりました。)

・宿泊先ホテルの金陵飯店にチェックイン

(南京で有名な老舗ホテルでロケーション抜群のホテルです。ミネラルウォーターがサービスされ水の心配もなく、エレベータを使用する際は部屋の鍵を差し込まないと、階数のボタンが押せないシステムになっておりセキュリティの良さも感じました。)

2日目 10月24日(月)

・南京臨時大統領府を視察

(南京總統府は国内で一番大きな近代史博物館であり、600年間の歴史を持っています。1840年のアヘン戦争から、1949年に中国人民解放軍が南京を解放した100年を超える時の中で、ここは何度も中国の政治や軍事の中心となり、重大な事件の震源地となりました。1912年1月1日、孫中山氏は南京總統府で宣誓し、中華民國臨時大總統に就任しました。当時を記録した写真は現在まで1枚も発見されていませんが、その時の様子を記述する文章を通じ、宣誓し就任した場面が、とても雄大であることが分かる事や17省の代表らや、多くの国内外の記者、南京市の市民など、数え切れないほどの人が参加し、この重大な瞬間を目撃し、孫中山氏の意気軒昂の大統領の風格、立派な偉人の気概が十分に表れ、「中山氏は節約して質素な生活を過ごし、人当たりが良く親しみやすく、たばこも吸わない、お酒も飲まないなど、人々によく知られている。しかし、私は、さらに人々に知っていただきたいのは、中山氏の立派な指導者としての風格だ」との説明がありました。)

・世界遺産である明孝陵を視察

(2003年7月3日にユネスコの世界文化遺産に登録された「明・清王朝の皇帝墓群」の一部を成しており、方城の北にある宝頂(宝城)の地下に朱元璋と馬皇后が眠る地下宮殿「玄宮」があります。また、地下宮殿は未発掘のために多くの謎が残されています。周辺には神道、梅花山、紅樓芸文苑、海底世界、定林山庄、紫霞湖があり明孝陵を中心としたこれら観光区を「明孝陵景区」とし、世界文化遺産に登録されているものの、外国人観光客はあまり見かけませんでした。しかし、中国各地から団体観光客が訪れているようですので見学者数は多いとのこと。朱元璋が葬られている宝頂には登ることができ、2月は近くの梅花山の梅が見ごろで観光イベントが行われて多くの観光客で賑わっているそうです。この梅花山には三国志で名を馳せた呉の孫権の墓もあります。ほかにも明孝陵周辺には中山陵や靈谷寺といった観光地があり、南京の主要観光地としてたいへん魅力あるエリアとして形成されていました。)

・江蘇省人民代表大会常務委員会表敬訪問

今回の訪問団の目的地のひとつであります江蘇省人民代表大会常務委員会を表敬訪問いたしました。江蘇省と石川県は友好交流地域として、1995年11月5日に提携をし交流関係を深めてきました。

江蘇省は中国大陸の東部沿岸地方の中心、長江の下流に位置し太湖をはじめ多くの淡水湖があります。運河が網の目のように広がる南部は中国一の水郷地域で、人口は約770万人で石川県の約65倍、面積は約1026万km<sup>2</sup>石川県の約25倍、文化、芸術など本県と活発な交流を進めてきました。

今回の表敬は議会として更なる交流強化を図ることが目的です。江蘇省人民代表大会常務委員会から丁副主任をはじめ各委員の皆さんの出迎えを受けました。会見では丁副主任から人大を代表して「30年以上の古い友人、石川県は故米沢外秋氏、金原県議そして谷本知事が江蘇省榮譽公民を授与されている。」「東日本大震災のお見舞いを述べられ1日も早い復興、復旧を望む。」「強い絆でアジアの平和、世界の平和のために貢献していこう。」「江蘇省のいろいろな所を見ていってください。」と、丁重な歓迎挨拶をされました。

木本団長からは「熱烈な歓迎に対し心からの感謝、大震災もその後の原発事故も石川県には被害が無く安全・安心、中国からの日本観光が1日も早く震災前に戻ることを期待する。1976年35年前の青年団としての初訪問から大切な友人としてお付き合いいただいている。これに感謝をし、これからも日中友好の橋渡し役を果たしていきたい。」と返礼のご挨拶を致しました。

その後、江蘇省人大常委会主催の歓迎宴が行われました。

・南京城壁を視察

(市内中心部を取り囲む全長約35kmの世界最大の規模を誇る南京城の城壁を視察しました。明の皇帝・朱元璋が、都を1366年に南京に定めた後、この城壁を建造するために工匠、工夫として全国各地の罪人を集めたそうです。30余年の歳月をかけて1391年に土で固めた全長60kmの外郭ができあがり、その2年後の1393年に完成したそうです。都市部の中核を成しているのは、現在「明故宮」と呼ばれている紫金城で、北京の故宮は南京のものを模して作られたとのことです。)

・南京空港から中華航空(MU2895便)にて西安へ移動

(南京から西安までの所要時間は2時間25分でした。)

・西安到着後、陝西省野生動植物保護協会副秘書長の常秀雲さん、石川県華僑華人聯誼会の種事務局長と共に懇談会

（常さんからトキ保護のこれまでの活動を伺い、翌日のトキ視察の参考になりました。種事務局長は8月しいのき迎賓館で開催された「中国展」で来日されたとのこと。常さんからNPO法人日中朱鷺（トキ）保護協会名誉会長の村本義雄さんとの深い友情関係も話されました。）

・宿泊先ホテルの西安皇城豪門酒店にチェックイン

（西安一の繁華街である東大街に位置するホテルで、客室も広く清潔で日本語も通じ使い勝手が良く、ショッピングや外食にも大変便利な繁華街にありながら静かで驚きました。）

3日目 10月25日（火）

・洋県のトキ保護センターを視察

（早朝から専用車にて高速道路などを約4時間以上走り、洋県にあるトキ保護センターへ向かいました。広大な中国の自然と農村地域を眺め都会との格差を感じつつも、高度成長を成し遂げている大国の国力も車窓から感じました。）

<トキ（朱鷺）の説明>

コウノトリ目トキ科の鳥。19世紀までは東アジアに広く分布しており珍しくない鳥であったが、20世紀前半には激減した。2010年12月上旬の時点で中国・日本・韓国を合わせた個体数は1,814羽。学名は*Nipponia nippon*（ニッポニア・ニッポン）であり、しばしば「日本を象徴する鳥」などと呼ばれるが、日本の国鳥はキジであり、新潟県の「県の鳥」、佐渡市と輪島市の「市の鳥」でもあります。

中国でトキの保護活動が成功したのは、未開発な土地が多かったことや、1990年に37,549ヘクタールにわたる陝西省トキ自然保護区が制定されるなどの政府主体の強力な保護活動が行われ、早期に生息環境が整備されたことが挙げられております。特に洋県では化学肥料・農薬の使用や森林の伐採が禁じられます。また開発も大幅に制限されてしまい、年間2000万元（約3億円）の減収となったそうです。またトキの生息域内には電気も通っていない貧しい地域が多かったため、生息地の保護と同時に現地住民への援助・負担の軽減も幅広く行われいたそうです。地元住民からトキ保護職員を採用するなどの制度もそのひとつです。このような政府と住民が協力してトキを保護していく関係を形成していったことが、中国におけるトキの個体数回復の大きな要因になったようです。



野生のトキを観察できるよう現地のスタッフ(トキのようすを監視報告する専門職員)が、電話で連絡を取り合いながらトキを探し出して我々を居場所に案内して頂きました。水田、川面で野生のトキを発見し、バスを降りて野生のトキをカメラに納めるためあぜ道を走りました。思ったよりも大きく、羽ばたいた時の薄ピンクの羽がとても綺麗で今でも目に焼き付いております。

その後、約100羽のトキがセンター内で飼育されている施設を視察しました。このトキ保護センターは、1990年に設立したトキの人工飼育・繁殖を目的とした施設で、敷地面積1.5ヘクタール内に、飼育ケージ鳥舎が24箇所計840㎡、ドジョウの飼育養殖池が3,000㎡、人口水場・湿地が5,000㎡設置され、さらに2002年には高さ35メートル、敷地面積7,240㎡の大型飼育所を増設しております。このスペースは高台の観察舎から見渡せるようになっていて、トキを野生に戻すための実験拠点として、野生のトキの生活環境に合わせた工夫されている事がよく解り、実際にトキがエサを食べて空中を飛び回り、自然に繁殖するのに最適な環境が提供されているのを目の当たりすることができました。

<センター員の説明と質疑応答では>

「洋県にしかトキはいなかったそうです。(1981年に)最後にみつけた(再発見した)7羽もこのあたりにいて、世界のどこかにまだトキが現存しているだろうかという話題がおこり、昔ここにトキがいたという噂を聞きつけた北京の研究者がわざわざ洋県までトキを探しにきて地元農民に案内されて、生きているトキを見つけました。さらにトキのあとを追いかけたところ、トキの卵もみつけ、人工飼育を続けた結果、徐々に数が増えました。」、「洋県のトキの保護区は半径約20キロの範囲であり、その区域内にトキが約1,000羽生息しており、野生のトキはここにしかいません。」、「トキの生息地の田畑は農薬を使用しないことになっており、そのエリアは保護区を中心部約半径10キロである。トキと共生するため、ここに住む農民は無農薬の農業を行っている。」、「トキの餌は主に水田の昆虫を食べて暮らしている。」、「収穫前は川で餌を探しているが、稲の刈り入れが終われば田んぼに飛来してくる。」、「トキを最も集中して見かける時間帯は朝10時頃である。」、「繁殖期は毎年3月～7月までである。」、「1回の産卵の数は3個～4個である。通常、その産卵したものうち1羽だけが元気に成鳥になる。」、「トキの天敵はヘビで、ヘビがトキを食べ、その卵も食べてしまう。」との説明があった。

2010年から「いしかわ動物園」ではトキの分散飼育に取り組み成功し

ております。将来、石川の里山をトキが舞うような自然環境はほど遠いものと思っておりましたが、しかし、訪れた洋県ではモータリゼーションが進み工場も見かけられ、有機栽培などの無農薬方法が進めば（洋県の場合はトキ保護センターの周囲半径10キロが農薬使用禁止エリアで収量不足分は国が補助する。）トキの飛来が決してそんなに遠い未来ではないと感じました。

夕方、西安に戻り中国陝西省の古都、西安市南東郊外約4 km先にある仏教寺院へ。三蔵法師玄奘ゆかりの寺として知られている大慈恩寺（だいじおんじ）を短い時間でしたが見学し、夕食後ホテルに戻りました。

4日目 10月26日（水）

・世界文化遺産 兵馬俑（へいばよう）を視察

始皇帝の兵馬俑が発掘されて世界を驚かせたのは1974年のことで、畑を営んでいた農民が井戸を掘ろうとして偶然見つけたのがきっかけだったそうです。その当人は現在、博物館の名誉副館長となっています。

発掘され調査が行われると、人々を驚かせるような事実が次々に明らかになりました。例えば、これらの兵士の俑にはどれ一つとして同じ顔をしたものはないことや、秦の軍隊がさまざまな民族の混成部隊であったこと及びかつての秦の敵国が存在した東方を向いて置かれていたことなどです。当時の秦軍の装備や編成等、これまでは文献史料のみでしか伝えられていなかったものが、こうして実物大のものとして現代に生きる我々の目の前に登場したことは非常に大きい意義があります。実物は兵を強く見せるために大きめに作られているとも言われていました。現在でも、この大文物群の調査・研究は続いており、近年の調査によると、従来来世へと旅立った始皇帝を守るべく配された軍隊と思われていたこの大文物群はそれだけでなく、生前の始皇帝の生活そのものを来世に持って行こうとしたものであったとのこと。兵馬のみならず宮殿の実物大のレプリカや、文官や芸人等の俑も発掘されていることがそれを証明しているようです。まさに世界遺産と呼ぶに相応しく感動しました。

・観光地 華清池を視察

西安の北東30キロメートル驪山（リーシャン）の麓にある温泉地で、玄宗皇帝と楊貴妃が過ごしたラブロマンスで有名な場所です。白楽天の『長恨歌』でも「春寒くして浴を賜う華清の池、温泉の水清らかにして凝脂を洗う」とうたわれています。玄宗が使った「蓮華湯」や楊貴妃専用の「海棠湯」などの浴場跡も発見され公開されています。また、ここ

は1936年の西安事件で、蒋介石が張学良らに監禁された場所でもあり、事件時の蒋介石の執務室もそのまま残されています。8世紀の盛唐期から現代史までの歴史舞台を知ることができる貴重な観光地でした。

・西安空港から中華航空(MU291便)にて上海へ移動  
(西安から上海までの所要時間は2時間でした)

・現地進出石川企業との意見交換会

上海浦東国際空港着後市内に移動し、小松精練株式会社上海事務所 山田樹代表、PFU上海計算機有限公司 真田清司さん、伊祥雅商貿上海有限公司 伊勢寿子代表、製造販売業 中田薇さん等と懇談しました。主な意見聴取の内容は「上海市内の再開発のスピードが速すぎて、周辺の急速なインフラ整備に戸惑うことがある。」、「円高に困惑しており、従業員の賃金に影響が大きく雇用負担を強いられている。」、「社会保険料の制度改正への対応では、日中両国での二重払いが発生して苦慮している。」、「中国人は愛国心が強いが、愛社精神はない。また、サービス業などの第3次産業への転職者が多い傾向にある。」、「やや収束気味とはいえ上海市内の地価高騰も相変わらず続いている。」などの海外進出の苦労話で外国人の企業創業については厳しい規制があること等を学びました。しかし、これからは富裕層向けサービス業が産業として発展していくのではないかとのことでした。

・宿泊ホテル 上海大廈 チェックイン

外白渡橋(ガーデン・ブリッジ)の北のたもとにそびえ立つ1934年にオープンしたホテルです。ホテル内は近年内装をすませ、外観とは異なり綺麗に整えられていました。外国人向けに長期滞在用のアパートメントとして営業が始まったことから、シャンハイマンションの名がつけられています。18階のバルコニーからのバンドの夜景は上海一とホテル側は自讃しています。半数の客室から絶景を望むことができ部屋は3m近い天井と32㎡の広さで開放感を与えています。

5日目 10月27日(木)

早朝ホテルを出発し上海浦東国際空港発から石川に帰国  
(上海から小松までの所要時間は2時間でとても短く感じました。しかし、上海で有効に時間を過ごすためにも、午後又は夕方から出発する小松便の必要性を感じました。)

以上で視察報告を終わります。

## 石川県議会議員中国行政視察訪問報告書

石川県議会議員 本吉 淨与

10月23日から27日まで、石川県議会議員中国訪問団の一員として、中国を訪れました。私自身、初めての中国訪問ということもあり、貴重な経験をさせていただき、大変有意義な視察となったと感じております。以下、訪れた箇所のレポートをしながら、視察報告を致します。

### <10月23日>

小松空港から約2時間半のフライトで上海浦東国際空港まで到着しました。

上海市は、昨年、万博が開催された国際都市、中国最大の経済都市ということもあり、道路などインフラも整備され、市内各所で建設工事が行われていまして、まだまだ市内開発の伸びしろはあると感じました。現地の方の話によると、上海の変化について、「上海は3年、間を置くと全く違う街に変わっている」と上海市長が言ったそうですが、今回の訪問団員の中からも、上海に以前に来た時と比べて、かなり変わったという感想が出ていました。

空港から上海駅に移動し、夕方の高速列車に乗って南京市へ移動しました。車内の電光掲示板に現在の時速が表示されており、最高で320km/hまでスピードを出していました。400km/h以上で走行できるとのことですが、事故があつて以来、最高速度を落として運行しているとのことでした。

南京市では、秦淮河を視察しました。秦淮河は、揚子江の支流で南京城内を運河のように流れている河と城外を流れる河に別れているのですが、今回視察したのは城内を流れている方です。南京では、市を上げて秦淮河を観光資源として整備し、河を遊覧船で廻ることができるようになっていまして、夜には、船から見る角度に合わせて街並みがライトアップされ、素晴らしい夜景を作り出しています。

街を挙げて観光資源に合わせて景観を創り出し、観光資源の魅力をさらに引き出すようにしていく施策は非常に勉強になりました。

### <10月24日>

午前中に、南京臨時大統領府と明孝陵を視察後、江蘇省人民代表大会常務委員会を表敬訪問し、丁副主任を始めとする委員の方々と懇談し、その後、江蘇省人民代表大会主催の歓迎宴に招かれて懇談しました。

表敬訪問での懇談では、江蘇省と石川県との友好・連携を深めていきたいという江蘇省人民代表大会と本県訪問団の真摯な熱意が伝わり合い、両省県のより一層深い交流を行っていきたいという思いが合致しました。丁副主任は、民間・青少年交流が重要であると述べられていました。

歓迎宴では、和やかな雰囲気、ざっくばらんに様々な意見を交換でき両省県の親交がより一層深まったと感じました。

午後からは、世界遺産登録を目指しているという南京城壁を視察し、その後、国内線で西安に移動しました。西安では、翌日に視察する予定の陝西トキ救護飼育センターについて、より一層の理解を深めるために、陝西省野生動植物保護協会副秘書長の常秀雲氏と会食し、陝西省のトキ保護政策について詳しくお聞きしました。

#### <10月25日>

洋県のトキ救護飼育センターを訪ね、トキ保護政策について視察しました。トキ救護飼育センターの周りでは、街の中心部から半径10kmの範囲において無農薬で農業を行うことにしており、トキの食料である昆虫や魚を確保し、トキの保護に努めているとのことでした。中国では1981年にトキが7羽確認されて以来、国による保護政策によって、人工飼育による繁殖など研究・増殖に取り組み、2010年10月時点で、野生・飼育合わせて1,800羽までトキを増やすことに成功しました。

先方のご尽力もあり、放鳥された野生のトキを実際に観察することもできました。美しい朱鷺色の翼を広げて飛行するトキを目の当たりにし、いしかわ動物園で行われている人工飼育や県内のトキが生息できる環境づくりは大変有意義なものであると改めて実感し、是非とも、将来、トキが石川県において自然に繁殖・生息して欲しいと願うものであります。

#### <10月26日>

兵馬俑など西安市内を視察後、西安から上海へ飛行機で移動し、中国に進出している石川県企業の方々と懇談・意見交換を行いました。

小松精練上海事務所、PFU計算機有限公司、伊祥雅商貿有限公司の3社ほか1社の4名の方々と意見交換会であり、中国の社会保障制度の変更への対応が課題となっているという話、急激なインフラの整備と地価の高騰についても話題に上り、現地の情勢について勉強になりました。

<10月27日>

上海浦東国際空港から小松空港まで2時間余りのフライトで帰国しました。

どの場所も初めて訪れる場所であるということもありますが、野生のトキを見ることができたことや全人代の方々との懇談など、どの視察訪問場所においても大変貴重な経験をさせていただきました。この経験を日頃の議会活動に活かし、県政の発展の助けになればと思います。